風流江戸雀

杉浦日向子

新潮文庫

新潮社のハードカバー

■新潮コミック

百物語〔壱・弐〕

杉浦日向子

今は何処にいってしまったのだろう？　なつかしい江戸の魑魅魍魎たち。時間と空間を超えて、なぜか心にやさしい怪しの事ども——。

カバー　長友啓典＋K2

杉浦日向子

風流江戸雀

新潮文庫

風流江戸雀　杉浦日向子

す 9 2　新潮文庫 440

9784101149127

1910179004404

定価440円（本体427円）

どこか懐かしい江戸の情緒を「日向子浮世絵」を見て思い出してみませんか？　花見、吉原、行水、金魚売り、夕涼、紅葉、夜そば売り、火鉢、寒詣り……。町娘の純情な恋や、スネかじりの若旦那、長屋の夫婦喧嘩など江戸庶民の日常ドラマ……。現代の浮世絵師・杉浦日向子が「柳多留」などの古川柳を題材に、愛情を込めてしみじみと江戸の泰平を描き出す。1988年文春漫画賞受賞作品。

ISBN4-10-114912-7

C0179 P440E

〜〜新潮文庫〜〜

杉浦日向子の作品

江戸アルキ帖
風流江戸雀

カバー印刷　錦明印刷

新潮文庫

風流江戸雀

杉浦日向子著

新潮社

風流江戸雀

杉浦日向子著

新潮文庫

風流江戸雀

杉浦日向子著

新潮社版

4682

風流
江戸雀
えどすずめ

序文　日向子浮世絵

田辺聖子

この本にえらび採られている古川柳は、「柳多留」の中でもことさらの佳句で、古川柳の代表作ともいえるであろう。杉浦日向子さんの卓抜なる眼識を思わないではいられない。

川柳は俗なるものではあるけれど、俗きわまれば雅にいたるもの、何でもない日常の瑣事を詠んで人生の核心を衝くのである。

「喰つぶすやつに限って歯をみがき」

「壁のすさむしりながらの実ばなし」

など、人間への洞察力と共感はあたたかい笑いをよぶ。

杉浦さんはそれらの川柳で前後を挟み、起承転結をさりげなく利かせて、やわらかな、あたたかな人情世界を展開される。

舞台は駘蕩たる江戸である。泰平の桃源境を背景に、杉浦さんはみごとに、「柳多留」の世界を視覚化して定着する。そればかりではない。

杉浦さんの「江戸」は、たいそう厚みのある生活空間である。単に江戸に関する知識だけで描きあげられた世界ではなく、自身、江戸の香気にどっぷり浸り、そこから滴り落ちてくる、かぐわしい「江戸」のエッセンス、とでもいおうか。私はかねて杉浦日向子さんの絵のファンであった。氏の描かれる「江戸」の馥郁を愛する一人であった。

現代は四十年平和が続き、いささか江戸の泰平に似通いはじめているが、文化でいうと、江戸三百年の厚みに匹敵すると誇れるものがなにほど残せるだろうか。人間のくらしでいえば、人生を楽しむすべにおいて、現代人と江戸人とどちらがより深く知っていたろうか。現代人の省察と批判力をもって、杉浦さんは「江戸」の空をほしいままに駈けり、私たちは杉浦さんの手に曳かれて、はるばると「江戸」の匂いをかいで魂を慰めるのである。いうならば杉浦さんの絵は「日向子浮世絵」とでも名付くべきか。

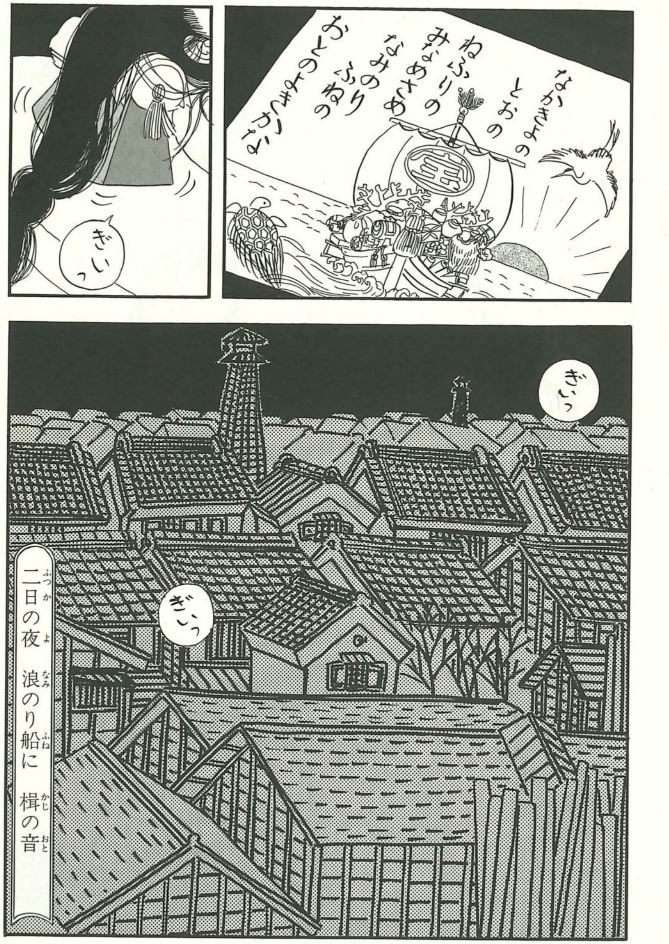
本書は、川柳と「日向子浮世絵」で描いた、「お江戸夢華録」であり、私の身近において愛玩する一冊となることであろう。

I

風流 江戸雀
正月
女房を ちっと見直す まつのうち
初湯かい？
ポリ
ポリ
オヤ お前さん お帰り。

年始はすんだかえ？
ナニ、行く先々でふるまわれるから二三軒で足がヨロ〳〵。
あとは明日〳〵。
オホホ。
それにしてもコウ雑煮と屠蘇ばかりじゃ。
米の飯と普通の酒が恋しいの。
あと一日だよ。
ウン。
チラ…
米の飯と女房には飽かぬ…とやら。
うーむ。

お前さん。
ん
今日はさソノ…二日だから。
二日？
年始
初荷
姫始め
鳥追い
初夢
ドキドキ
あっ
初夢だナ違ったかの…。
ワハハ
エエ人の悪い……。


なかきよの
とおのねふりの
みなめさめ
なみのりふねの
おとのよきかな
ぎいっ
ぎいっ
二日の夜 浪のり船に 楫の音
ぎいっ

風流 江戸雀
如月
〜雪降れば 冬籠りたる 草も木も 春に知られぬ 花ぞ咲きける
雪見とは あまり利口の さたでなし
ヘナント 仙公、どうも 云われぬ景色 ではないか。
ホンニノウ 奇絶〜〜。

それにしたって亀の奴つきやいが悪いぜ。
あいつは所詮俗物ョ花や月ならいい気になって騒ぐが、肝心の雪の風流を知らねえ。
コウいい景色を見ちゃあどうで一句ひねりたいところだの。
寒ウい。
熊、寒いと云ってくれちゃあ風流がぶっこわしだぜー
ナニサ只云ったばかりさ。
エエあんまり風雅すぎて体がほてる位だ!!

ハハ世に通人はいないものだのウ。
先刻から人ッ子ひとり通らねえ。
この絶景を見ずして内にこごまっている輩の気が知れねえな。
びゅっ
し‥‥ん‥

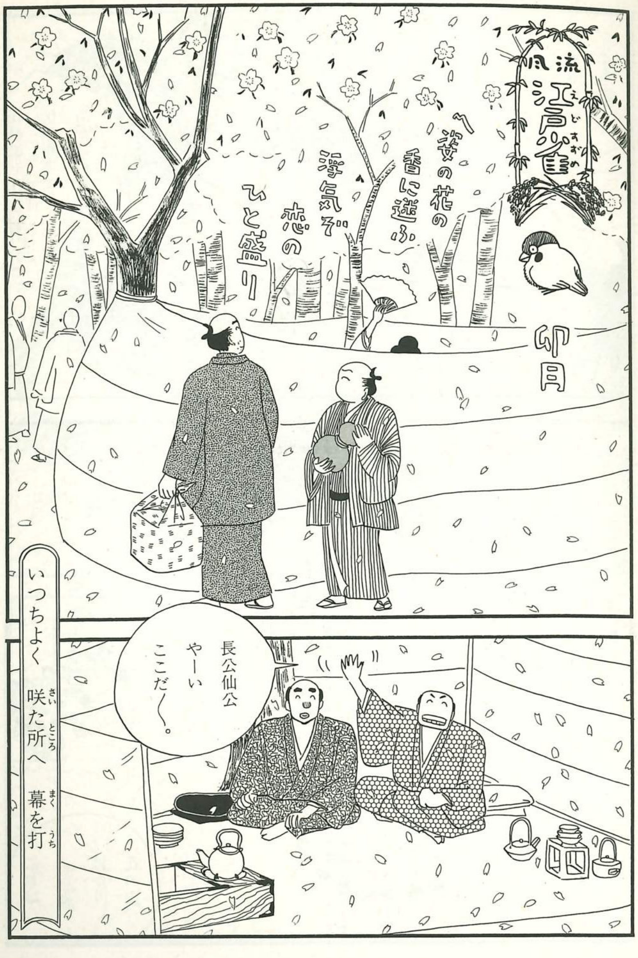
オイ
湯豆腐
まだかあ。
フウ、おらぁ
あのまんま
向島で凍り
固まってしまう
かと思った。
ガチ
ガチ
ガチ
やっぱり
炬燵にあたって
湯豆腐が大風流よ。
？
ばかめらと　雪見のあとに　のんでいる

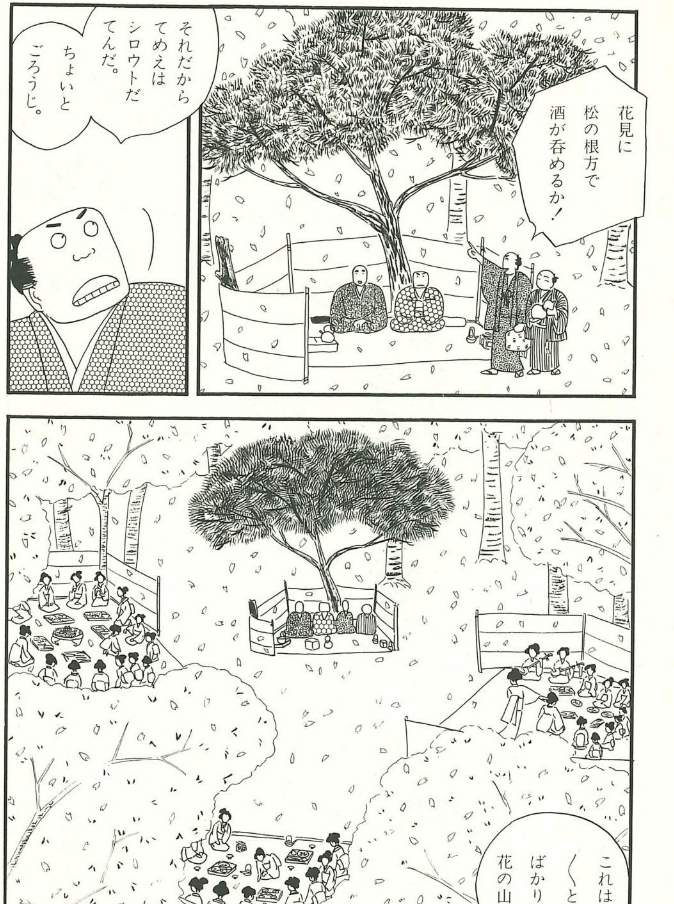
風流
江戸雀の
弥生
おじさん
今日は。
今日は。
ホーホケキョ
きかぬふり　するは娘の　吉事なり
お前は
むこうへ
行っといで。
はーい

・・・・。
ヒソヒソ。
ツン
あれはまだほんのガキだから。
子供と思っているのは親ばかりサ。
・・・・。
十六といえば娘ざかり向うさんは十九・・・。
いい年まわりじゃねえかね。
ん

さッ
あッ
まきちゃん入っといでオジサンじつはいい話持って来たンだ。
・・・・。
きっと気に入るともさ。
さあてといつがいいだろうね。

ぺしっ
ぱッ
お嫁なんか
いかない
よう!
コラッ
べ〜
仲人をこよみでたたくお茶っぴい


風流
江戸雀
へ姿の花の香に迷ふ浮気ぞ恋のひと盛り
卯月
いっちよく咲た所へ幕を打
長公仙公
やーい
ここだ〜。

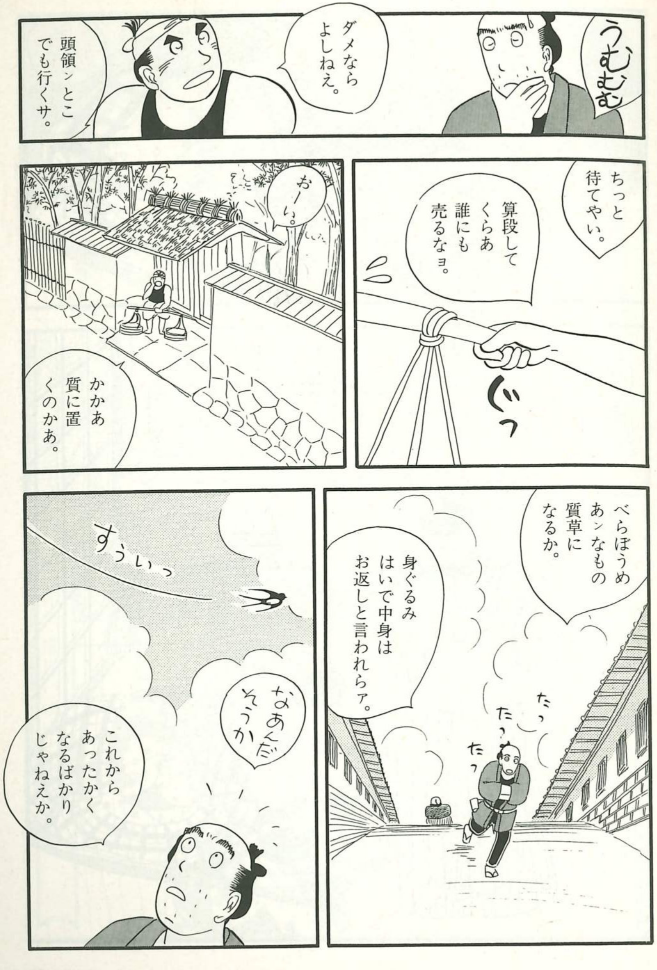

花見に
松の根方で
酒が呑めるか！
それだから
てめえは
シロウトだ
てんだ。
ちょいと
ごろうじ。
これは
〳〵と
ばかり
花の山。

やあ可愛いのウ
娘ざかりは
色ざかり。
ナンノ
小便くせえ
おらア
やっぱり
中年増がいい。
粋筋の女
がいいぜ
たてひきがあって
面白さがちがわあ。
ポツ
ポツリ
雨だ!!
さあっ
好事魔
多し!!

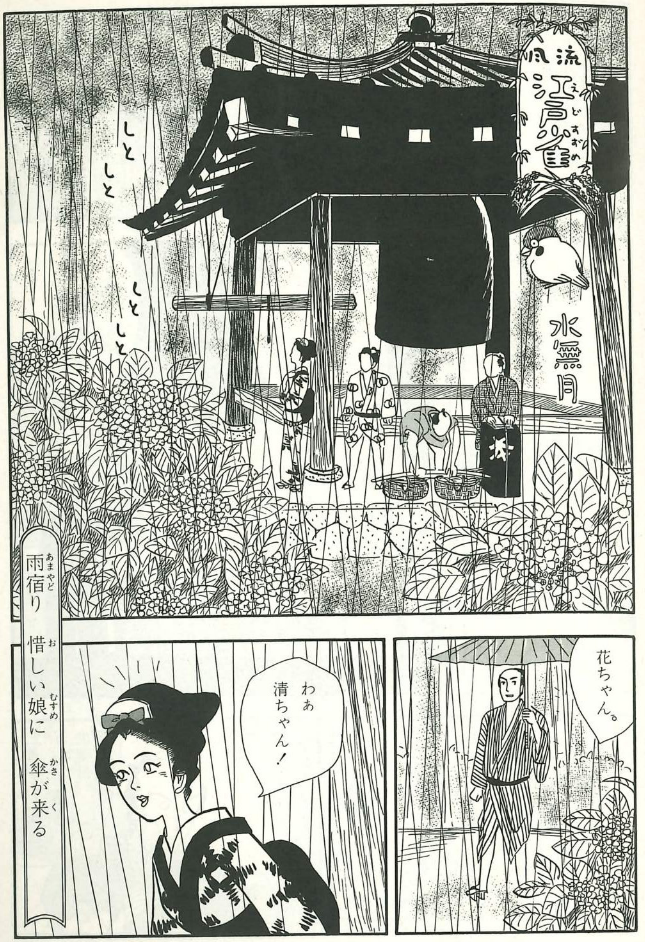
まて〱
あわてるない。
オロ
オロ
ホホッ
景物〱。
花の雨　ねりまのあとに　干大根

風流江戸雀
やアい亀
ゆんべの一声
聴いたかあ?
皐月
目も耳も　ただだが口は　高くつき
ナァニ
これから
辛子味噌で
食うとこサ。
ヌイッ

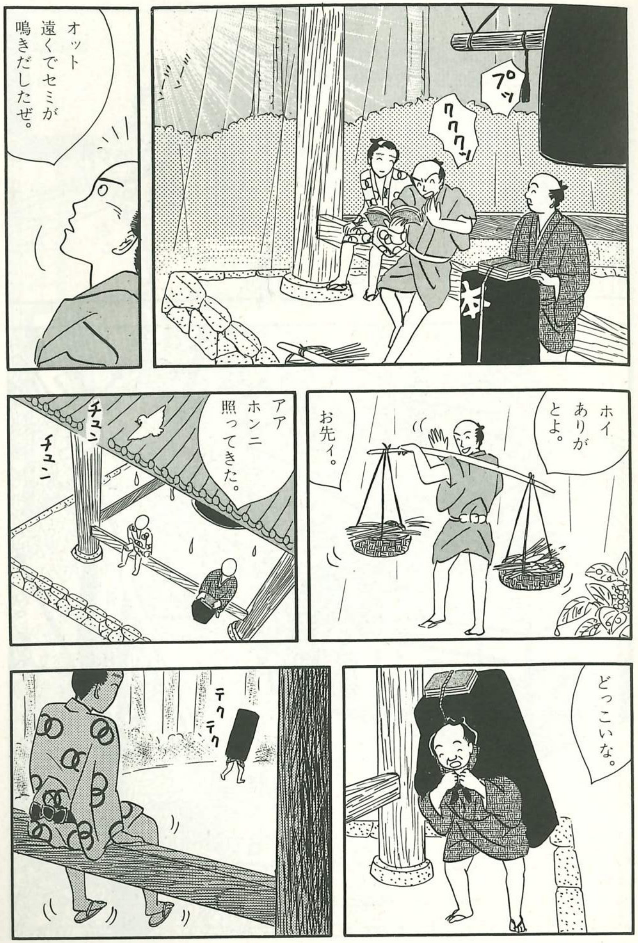
テル、
照公!!
今日はもう仕舞か？
ナニあと一本だ買うかい？
ギシギシ
おうっ長さん。
今朝方ァ五本仕入れて一刻足らずで四本売った。
ぱんぱん
むむ
やな事ゆうぜえ。
どうするシマイの一本だ。
安くしとかあこれでどうだ。
いい商売だの一刻足らずで一年分も稼いだろう。
一分か。
冗談いうない一両ョ！

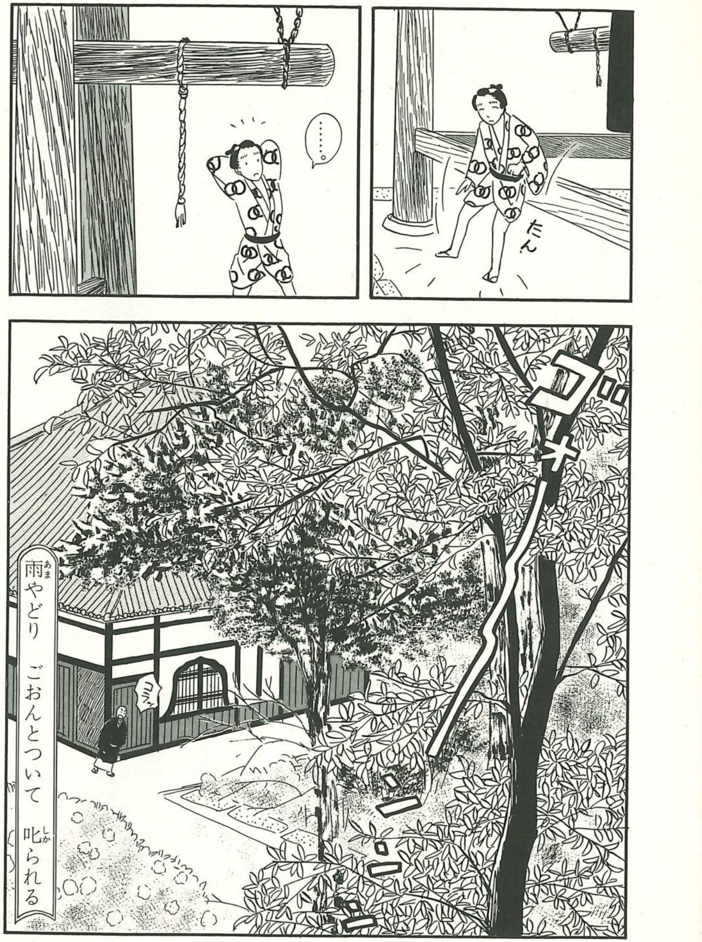

うむむむ
ダメならよしねえ。
頭領ンとこでも行くサ。
ちっと待てやい。
算段してくらあ誰にも売るなョ。
ぐっ
お〜い。
かかあ質に置くのかあ。
べらぼうめあンなもの質草になるか。
身ぐるみはいで中身はお返しと言われらァ。
たっ
たっ
たっ
すうぃっ
なあんだそうか
これからあったかくなるばかりじゃねえか。

コウト、
ぽいっ
これと、これと、
お前さんッ!!
ギク
寒い時 おまえ鰹が 着られるか

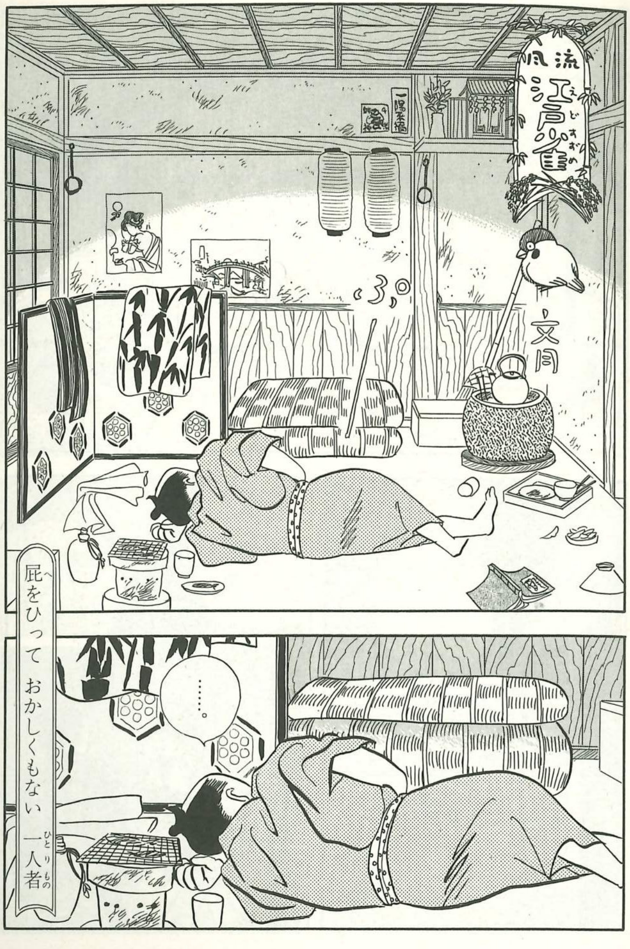

風流 江戸雀
水無月
しと しと しと しと しと しと
雨宿り 惜しい娘に 傘が来る
花ちゃん。
わぁ 清ちゃん!

……。
アア いい匂いだ その姫生姜 もらおうかの。
あいよ まけとくから なんぞみして くんねえ。
荷を解くのが 面倒だから これで いいかい。
あいよ。
三馬かナニナニ 「人間万事 虚誕計」、
ハイ 国直が良く 描きました。
おめえも 見るかい。
あい。

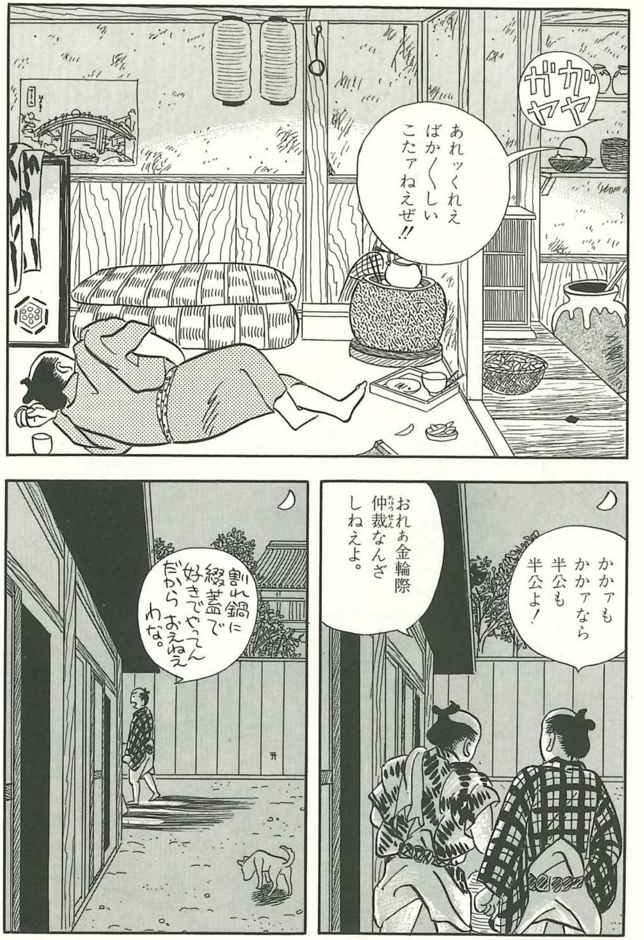

プッ
ククククッ
ジーン ジーン
オット 遠くでセミが 鳴きだしたぜ。
ホイ ありが とよ。
お先ィ。
アア ホンニ 照ってきた。
チュン
チュン
どっこいな。
テクテク

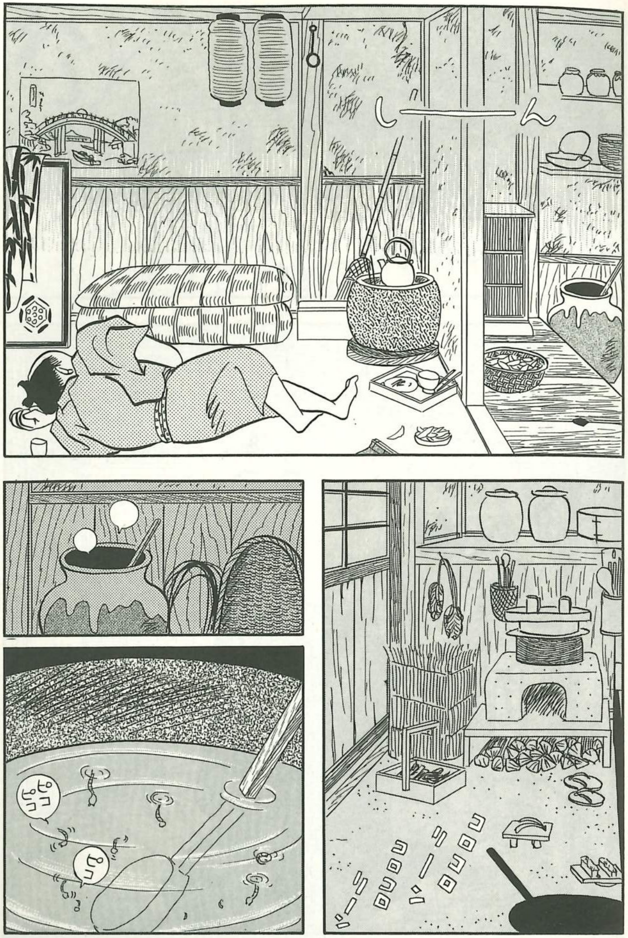


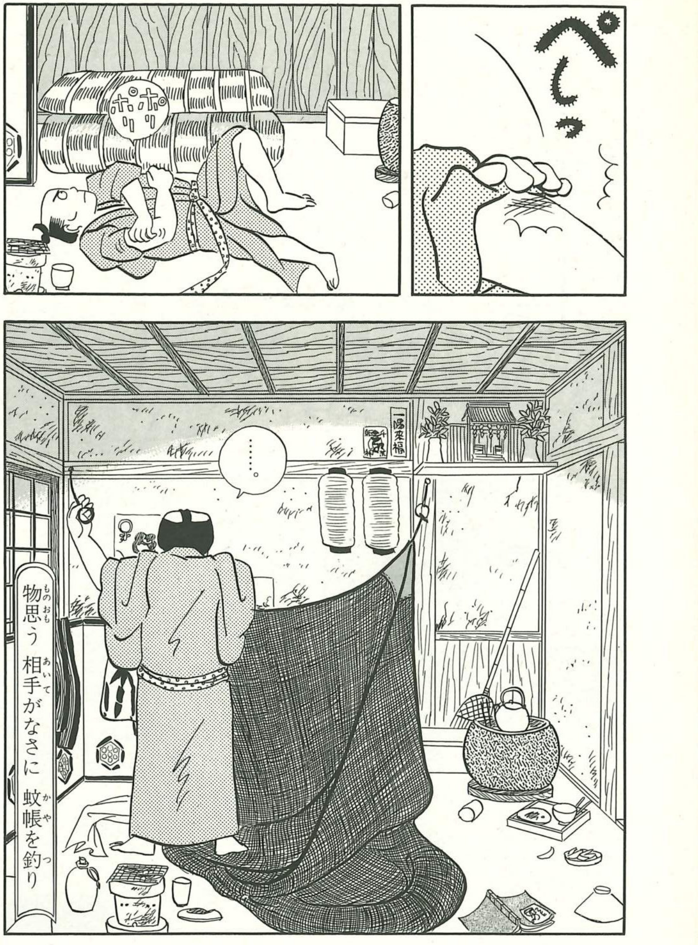
……。
たん
ゴォーン
コラッ
雨やどり　ごおんとついて　叱られる



風流 江戸雀
文月
屁をひって　おかしくもない　一人者
……。


ガガ
ヤヤ
あれッくれえ
ばか〜しい
こたァねえぜ!!
かかァも
かかァなら
半公も
半公よ!
おれぁ金輪際
仲裁なんざ
しねえよ。
割れ鍋に
綴蓋で
好きでやってん
だから おえねえ
わな。

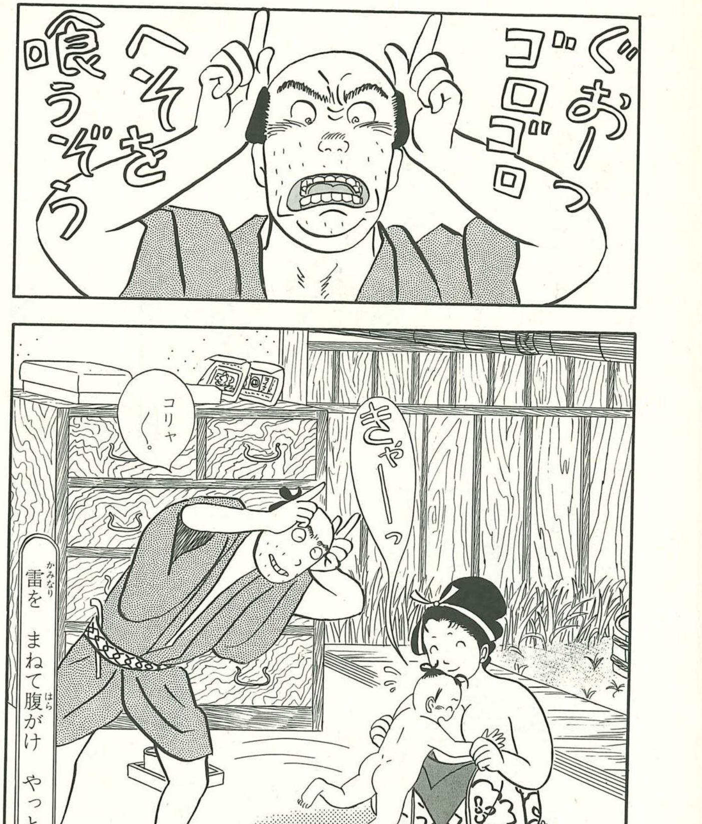

し――ん
ピコ
ピコ
ピコ
コロコロ
リーン
コロコロ
リーン


ポリポリ
ぺしっ
……。
一陽来福
物思う 相手がなさに 蚊帳を釣り

風流 江戸雀
菜月
行水へ 瓜のにほひを とぶりうめ

きんぎょ〜〜
きんぎょお〜
パチャ
パチャ
……。
……。
この手はッ!?
あたたた
あ〜??

ぱう〜っ
金坊!!
待ちゃ!!
わーい
ばた
ばたばたばた
コレッ
金坊!!
……。
きゃっ
きゃっ
ちょこまか
ちょこまか
どた
どた
どた
どた
お前さんッ。
ヲイ。
ワーッ


ぐおーっ
ゴロゴロ
へそを
喰うぞう
きゃーっ
コリャ〳〵。
雷をまねて腹がけやっとさせ

風流
江戸雀
長月
ヤア
橋上は
滅法界
暑そうだ。
やかたから人と思はぬ橋のうへ

ねえ、銀ちゃん。
昨年もコウして花火見たよねえ。
うん。
ドドーン
おとtoしもそうだったね。
うん。
ドドドーン
パーン
ドドーン
どうしてだろ?

……。
……。
おっ
おいら まだ稼ぎが 少ねえから 橋の上が やっとだ。
そのうち 一人前ンなったら 船とか料亭で……。
ちがうよ。なんで二人して コウやってるのかってことサ。
えッ!?なあんだ。そりゃあ、いつも お紺さんが花火 見たいって……。
ばかッ!!
ばしっ

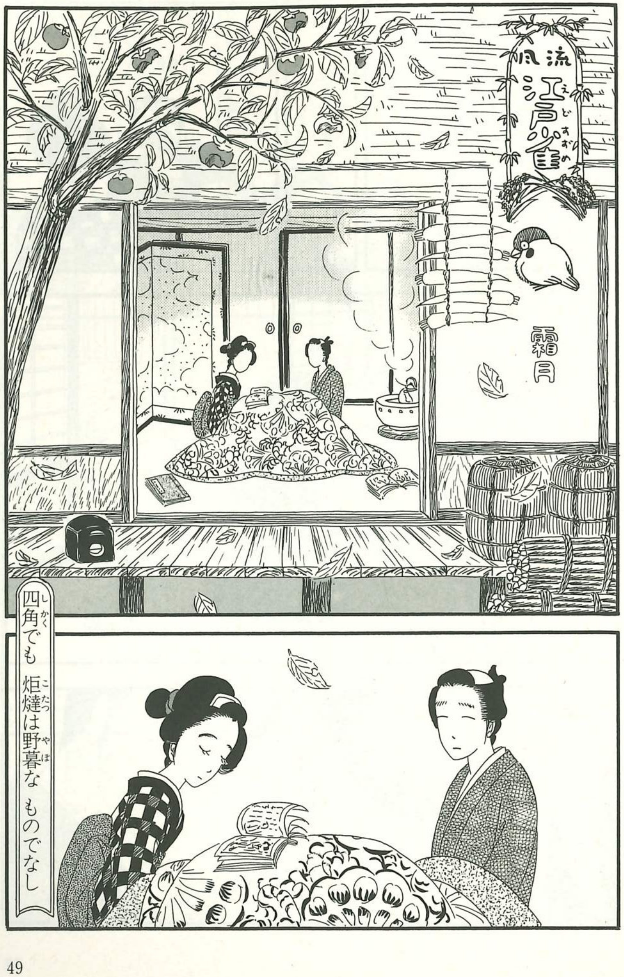
あたしが
コンなにも
………のに!!
パァーン
ドドドーン
えッ!?何!?
聞こえない。
ほれたとは 女のやぶれ かぶれなり
パァーン
ドドーン
ばか――ッ!!
えーッ??

風流
江戸雀
神無月
ホンニ
紅葉かえ?
ホイ
紅葉〳〵。
金坊
良かったね。
うーむ。
紅葉見と聞て内儀は 子をさずけ

オーイ
ここだ〜。
ナンダ
ガキおっつけられちゃったんかい?!
ったく
おめえッくれえドジな野郎はねえぜ!
しかた
あんめェす。
茶屋のおばさんにでも頼むさ。
金坊
いくつになったィ?
江戸近郊の紅葉の名所〈正燈寺〉
ちょいとずれ込むと花の吉原である。
千住→
北
日本堤
西
正燈寺
鷲神社
吉原
上野
寛永寺
浅草寺
南
東
すみだ川

ガサ
ガサ
つん
つん
バカッ
ミリャ
ギンナンだ
さわるんじゃねえ
長公
何やってんだ
早く歩びねえ!
おらァ
気がはやって
地面を踏んでる
ようじゃアねえぜ。
へへッ 会いたさ見たさは
飛びたつばかり♪
大文字屋に
スゴイ妓がでたとさあ。
ヨシサ
ソレ行こ〜。
……

オーイ
長公！
みんな
すまねえ
今日は紅葉
見て帰るわ。
そうかあ
なら無理にゃ
誘うめえ。
ナニヨ
お酉様ん時
又声かけらあ
じゃおれたち
あ行くぜ！
紅葉見に 例年行が いまだ見ず
玉屋の君里が
身受けされたってな
チイ！惜しいの
惜しいがあきれるぜ
三百両だ
出るか!?
ウゥ出ねえ…


風流
江戸雀
霜月
四角でも 炬燵は野暮な ものでなし

……。
にゃー
イテッ。
くすくすくす
すす

さあっ
オヤ留ちゃんお店はお休みかえ。
どき
旦那さんとおかみさんが酉の市へ行きやして。
へえ
こたつはありがたいねえ…。
オーさむさむ
はあ。
……。

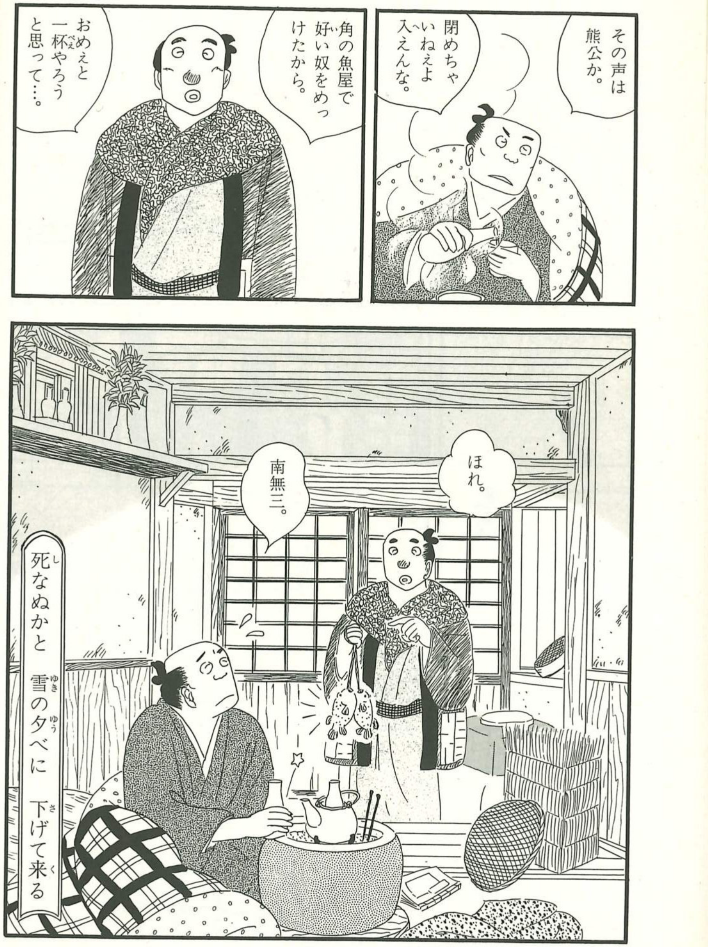
留ちゃん!?
うわっしまった。
はっ
母の手を握ってこたつ仕舞われる

風流江戸雀
師走
今帰っちゃ都合が悪い。
また何か用を言いつけられるぜ。
鍋でもつついてあったまってから帰らねえか?
鍋?アレじゃねえだろうな。
きゅっ
おそろしきものの喰たき雪の空

こんな寒い時ゃ河豚に決ってるじゃねェか。
おらァ抜けたぜ。
料理屋で喰うのだ。当たる気づけぇはナシさ。
それだとて万が一という事もある。死なばもろともなんざ御免の勧化よ。
江戸ッ子のようでもねえ。あとでくやしがるなよ！
首尾よく当ったら線香の一本も立ててやらあ。
へっ
冗談じゃねえや。

亀さんお帰り おっつけ戻る頃だと思って火ィ起しといたョ。
アイお世話。
へっくしッ
……。
ず…
ちん
ちん
ちん
亀
亀公。
ちん
ちん
ちん
どん
どん

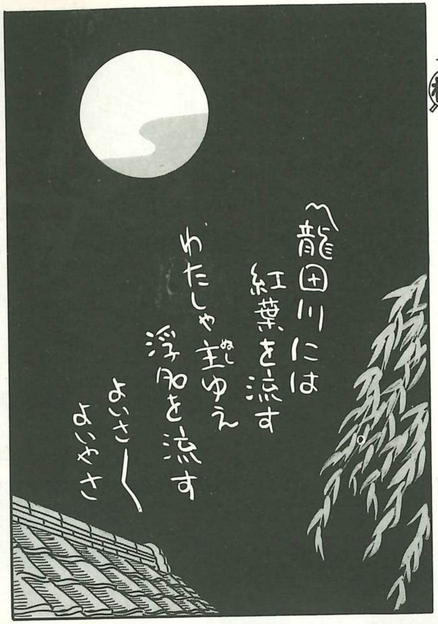
II



その声は熊公か。
閉めちゃいねぇよ入ぇんな。
角の魚屋で好い奴をめっけたから。
おめぇと一杯やろうと思って…。
ほれ。
南無三。
死なぬかと 雪の夕べに 下げて来る

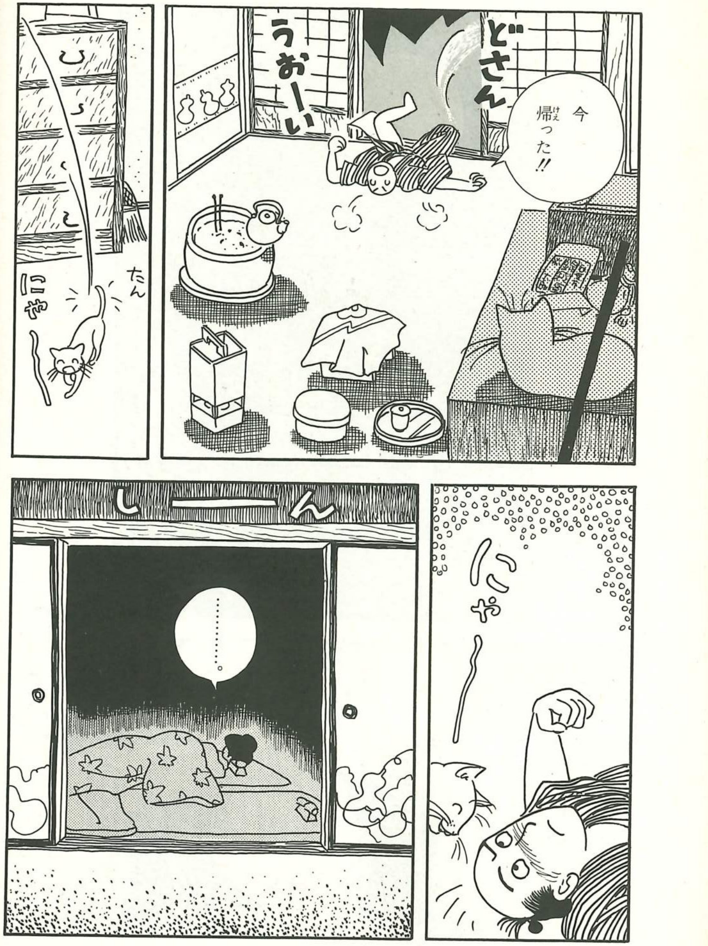
古川柳（こせんりゅう）

つま楊枝（ようじ）

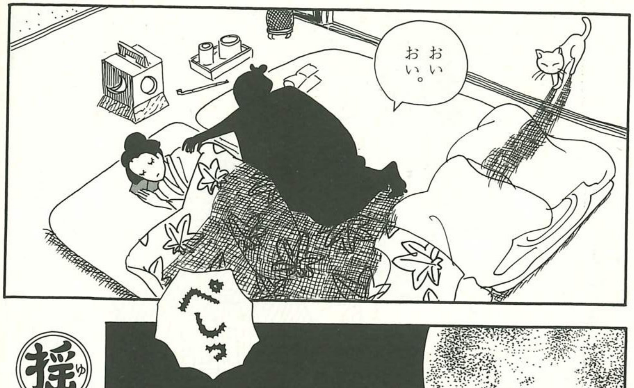


こ

こわい顔（かお）したとて高（たか）が女房（にょうぼ）なり


どさん
うぉーーい
今帰(けえ)った!!
たん
にゃ
にゃーー
しーーん
……。

おーい
猫が腹
へらしてん
ぞお。
めしやってねェ
んじゃないかぁ
とぽぽ…
ニャー
ニャー
ニャー
ぐい
ぐい
へッ
んべーっ
た・ぬ・き
あ・ま
にゃ〜
リーン
リーン
リーン
リーン
リーン

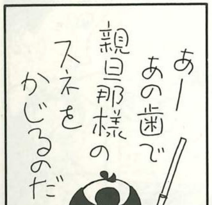


揺りおこす　手をたたかれる　あじけなさ

古川柳

つま楊枝

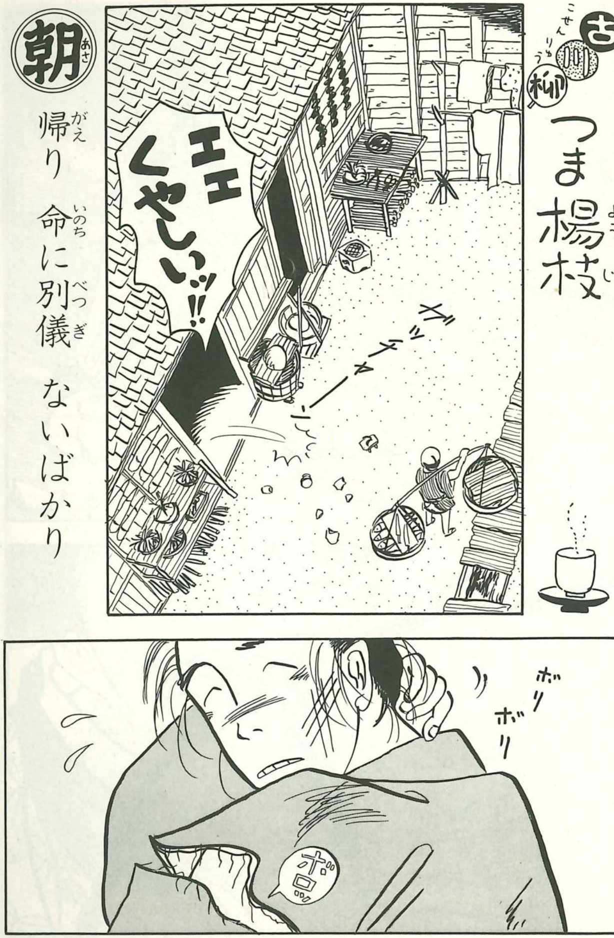
喰つぶすやつに限って歯をみがき

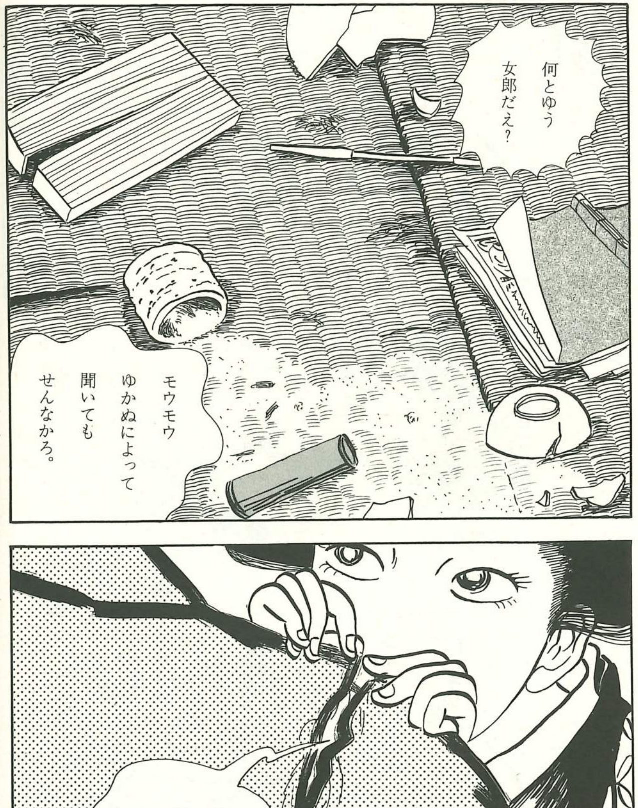


サダや
おはよ。
へえ。
チェッ
もう
お昼だい
ザッザッ
トン
トン
空が高いねえ。
低けりゃ頭が
つかえて迷惑すらぁ
ねえお前
今度の
女中どう
思うえ？
ヘッ!?
おキヨ
ですか？
なんだか
力が強
そうで……。
ツン
色気の
ない奴
だのウ。
どすどすどすどす
うふふふ

？
×××
××××
ナニうそ
ばっかり!!
バッ
若旦那様(わかだんさん)
のような
よい男が
わたしの
ような
中くらいの
ものに……。
わっ
ヒリヒリ
ぷっ
くくっ。

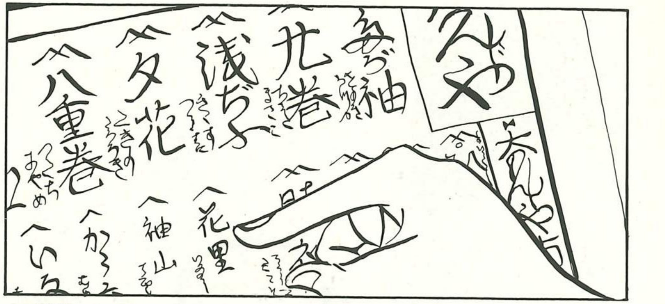
く
どかれて　あたりを見るは　承知なり
チチチッ
……。


古川柳
つま楊枝
朝帰り　命に別儀　ないばかり
エエくやしいッ!!
ガッチャーン
ボリボリ
ボロッ


何とゆう
女郎だえ？
モウモウ
ゆかぬによって
聞いても
せんなかろ。
ゆかぬなら
聞かせたが
よいわ。

は、花里
とか
ゆったっけ。
シュン
シュン
新吉原細見
…………。
…………。

※細見＝遊女名鑑

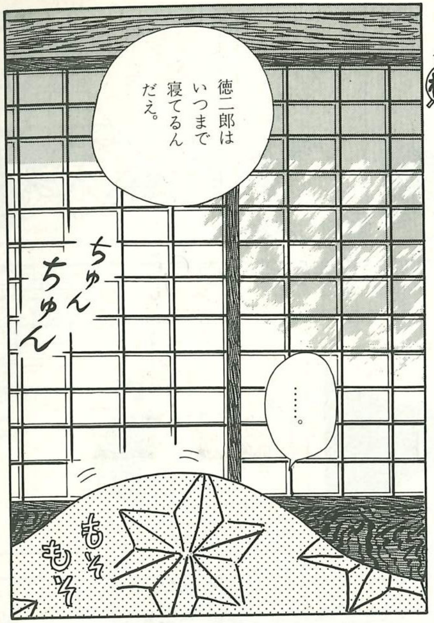


細（さい）

見（けん）をみてこいつだと女房（にょうぼう）いい

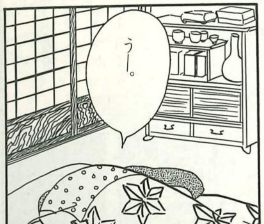
古川柳（こせんりゅう）

つま楊枝（ようじ）



朝（あさ）

寝（ね）する人（ひと）をおこすを昼（ひる）といふ

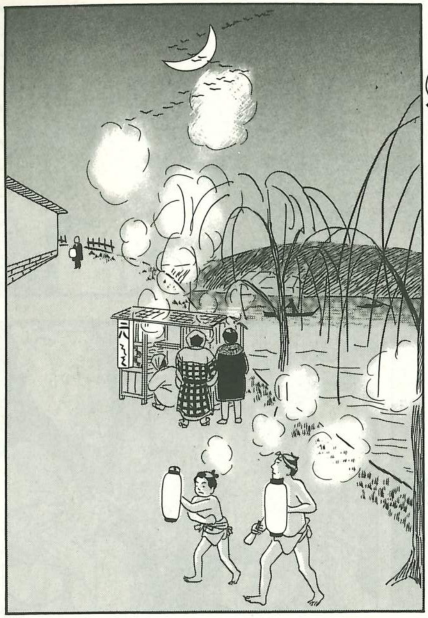


サダや、廊下の向いの部屋へ行ってネ、
へっ??
いいから言われた通りにおし。
へえ、行きました。
そしたらまっすぐ干場へあがってネ、
ぐるっと首を回してごらん。トラかタマかミケが日向ぼこしてるだろ?
そっと連れて来とくれ。

タマが居ました。
こっちィおくれ。
……?
はー
あったかかだ。お天道様の匂いがする。極楽だねえ。

しかられる たびに息子(むすこ)の 年(とし)が知れ

古川柳(こせんりゅう) つま楊枝(ようじ)



夜(よ) そば切(きり) ふるへた声(こえ)の 人(ひと)だかり

ハフッ ハフッ
ズズ
ズズッ ハフッ ズズッ
エ、きたねえ
ハナをかみやがれ！
ぐちゃぐちゃ
おーじーさーぁーーん
ぬっ
一杯おくれ〜
ぎょっ
ああびっくりした。
おらァぬっぺら坊かと思った
大きにお世話!!
ハハハ
ヒュー
くうーん
かわいい。

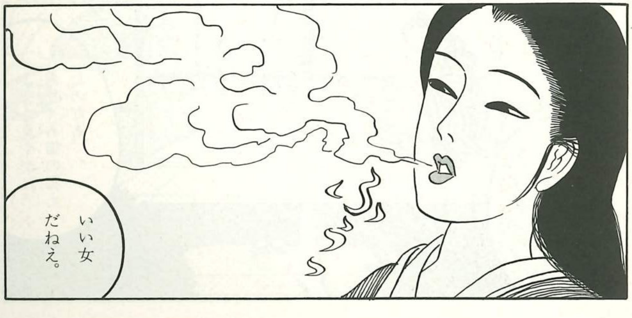
飼いたいねえ。
おめえなんぞの手に負えやしねえ。
よせよせこいつァ足が太えからでかくなるぜ。
そうかねえ。
ハッハッ
うちの猫が腹ぼてれんだ。
じき生まれるから可愛いのを一匹あげようか。
うれしい。
姐さん
ホイ、お待ち。
ア痛ッツ。

男じゃと いはれた疵が 雪を知り

古川柳

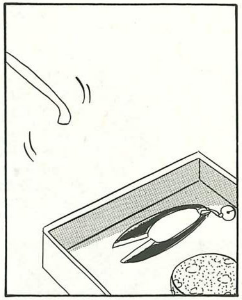
つま楊枝

酒と女は にくくない かたき役



ホーホケキョ
ケキョケキョ
そりゃそうと妾が飼うのは狆と相場が決ってるはずだがの……。
こかァ面白狸じゃあねえか。
ケキョケキョ
よっく見やがれ！ありゃあ猫の肥えたのだあ。
……あんなのを一度抱っこしてえもんだ。

狸猫をか？
オキヤガレ。
……。



煙(き)

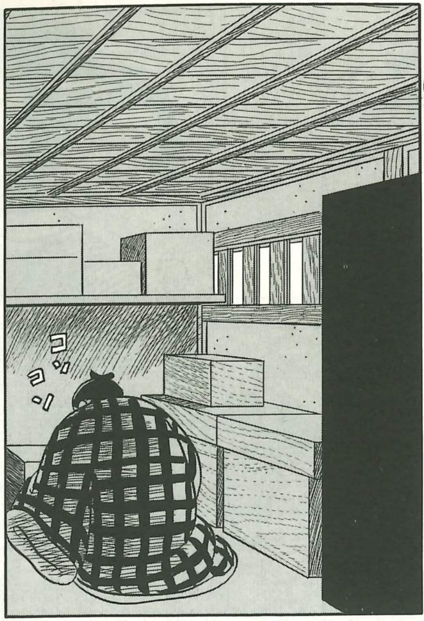
煙管(きせる)にて　とどかぬと　妾人(しょうひと)を呼(よ)び

古川柳(こせんりゅう)

つま楊枝(ようじ)

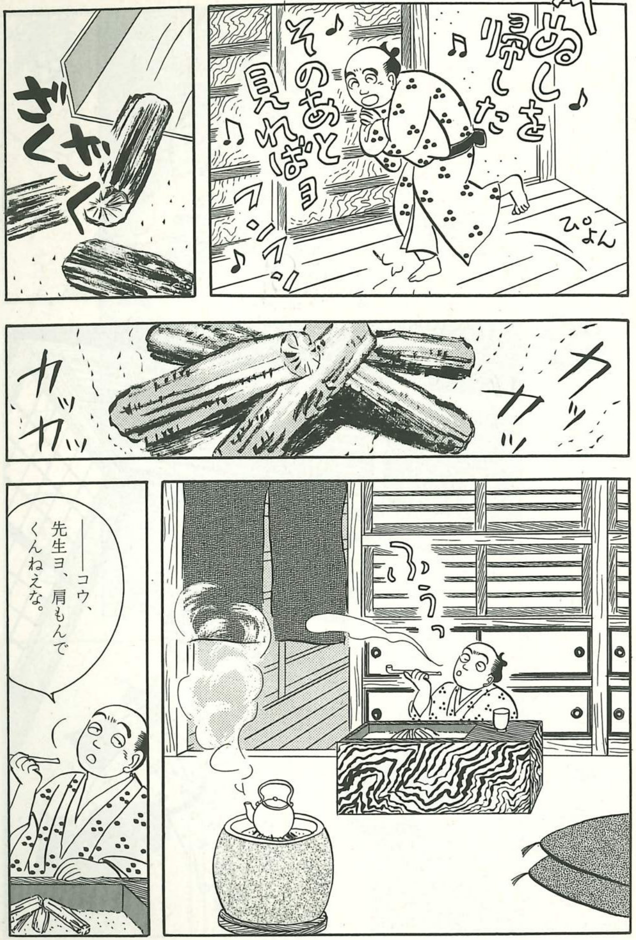
か

かかり人(うど)　何(なに)をするにも　手(て)くらがり

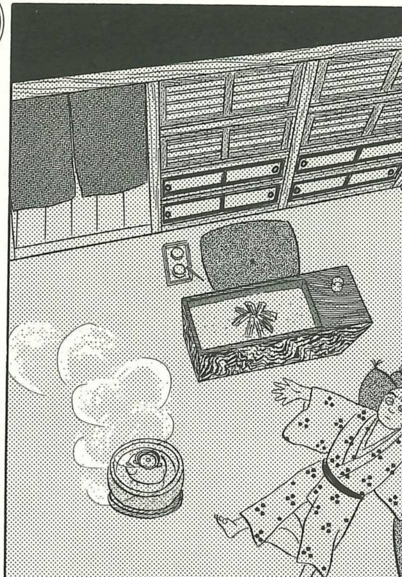


かかり人＝居候

——じゃ
留守番
頼みます。
へえ。
行って
らっしゃい。
ウフフ
アハハ
ニャッ

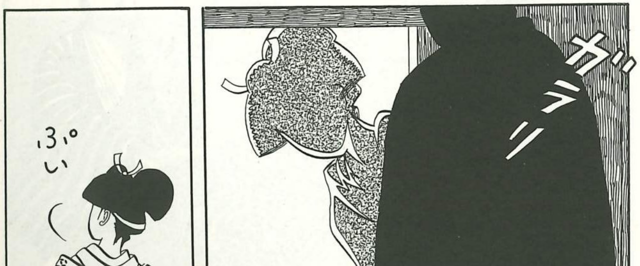

♪めしを帰した♪
そのあと見ればヨ♪
ぴょん
ざくざく
カッカッ
カッカッ
ふう
——コウ、
先生ヨ、肩もんで
くんねえな。

花の留守 大の字になる 居候



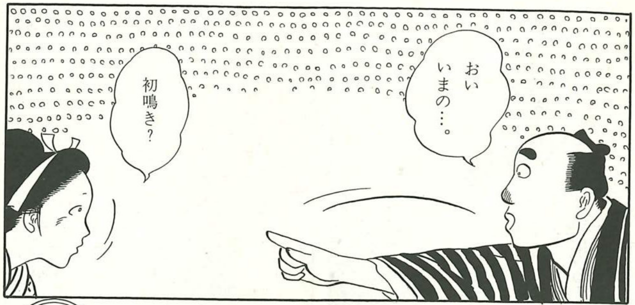
古川柳 つま楊枝

腹 さんざ戸をたたかせて 女房起き



イヤ、サスガに可楽の三題噺ははうまいものだ。
左様でございましょうとも。
近頃の噺家は白粉つけて吸いつけたばこでもふるまうのでござんしょうよ。
サア〳〵おかしな事をいいだした。
お前は人間は良いが時々見当違いなヤキモチを妬くのがキズだよ。
エエ、お生憎様。亭主が毎晩うかれて出歩いても家の中でニコニコと縫い物ができるほどお目出度く生まれつかなかったのが身の不仕合せサ。

何も手前一人の楽しみのために行くのじゃない。商いのためのつきやいてえものが…。
他人とのつきやいはご存じでも夫婦のつきやいはご存じない。
もとはといえば駆け落ち同然で所帯を持ったのにお前さんの心が浮気だから…。
コレそのようにハナから亭主を疑って女房がつとまるものか。
テッペンカケタカー
お前の浮気



ほ

ほととぎす　口舌(くぜつ)の腰(こし)を　折(お)って行(ゆ)き

古川柳(こせんりゅう)　つま楊枝(ようじ)

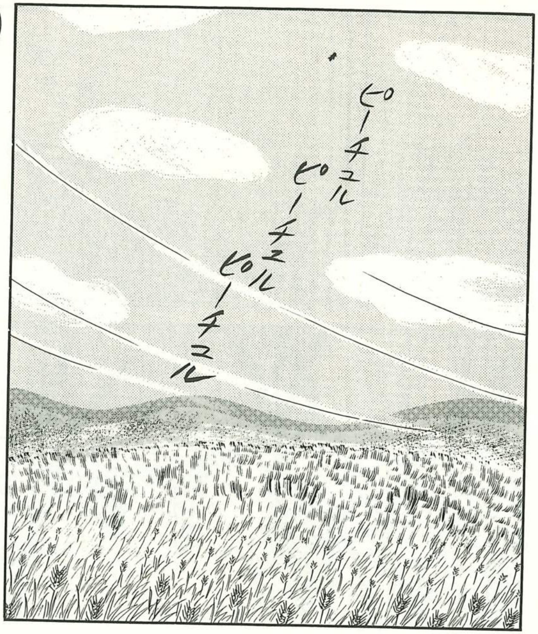
馬(ま)

子唄(ごうた)に　二人(ふたり)ひれふす　麦(むぎ)の中(なか)

早く行け〜。
源べえどん
あれあすこ。
さゎ さゎ‥
ニヤッ
ポイッ
ポイ
ポイ
ポイ

ばら ばら
ひっ
ぱら ぱら
カカカカ‥‥
ぱんぱん
〽ハオざくらのォ
枝ァおおりになァ!!!
ちゃんらん ちゃんらん
……。
六ちゃん
痛かねぇ
かえ?
ああ、
痛かァ
ねえよ。

出合(であい)する上(うえ)をひばりは舞(ま)って居(い)る



古川柳(こせんりゅう)

つま楊枝(ようじ)

おちゃっぴい へそから出(で)たと 思(おも)って居(い)

あーっ
はっはっ
はっは
ははは
やーッ へそたぁ 知らなんだ。
おれたち の時ァ ちがってた よなァ。
ばかーーッ!!

どん
おっと。
たたたたたっ
ナンダ ミー坊じゃ ないか。
ととさん かかさんは お達者かえ。
コクリ
イヤとんだ 娘らしく なったのウ。 驚いた。
……。

III

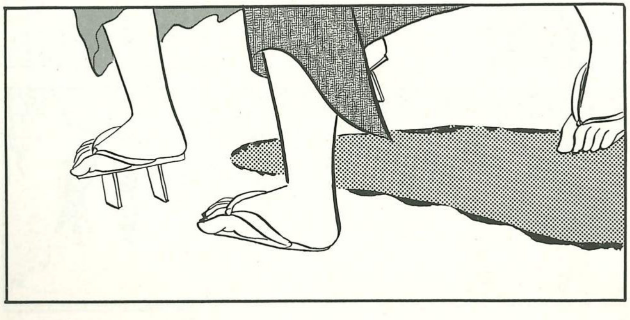
笑（わら）って見（み）ぷんとして見（み）る鏡（かがみ）の間（ま）

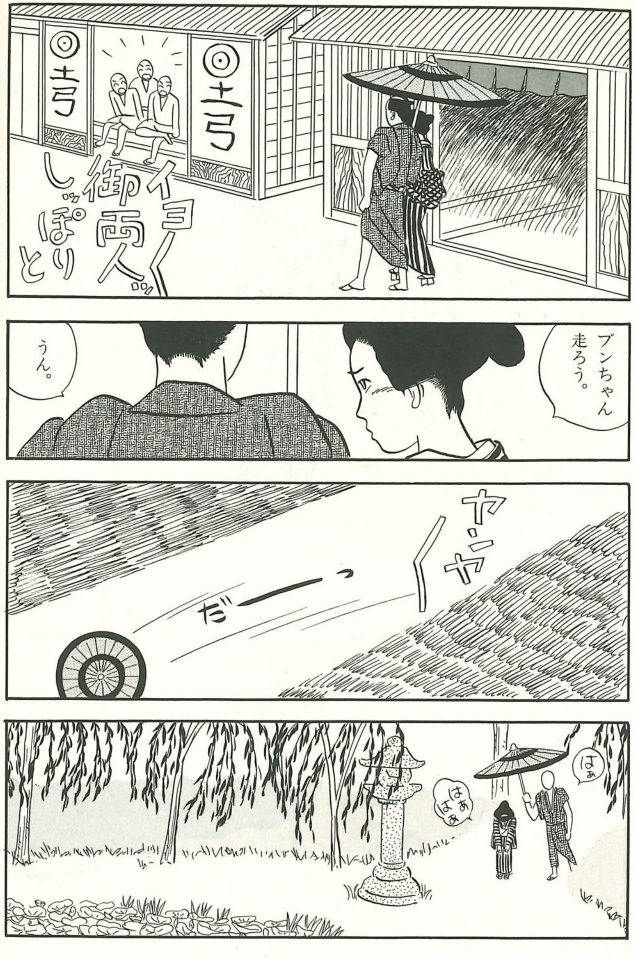
古川柳

つま楊枝

相

傘の　話の切れる　水たまり





イヨ〜
御両人ッ
しっぽりと
ブンちゃん走ろう。
うん。
ヤンヤ〜
だーっ
はぁ
はぁはぁ

雨、やんでる。
のどカラカラ。
麦湯
むぎゆ
シュー
シュー
ふぅ
蓮が咲く時音がするってほんとうかな。

れ

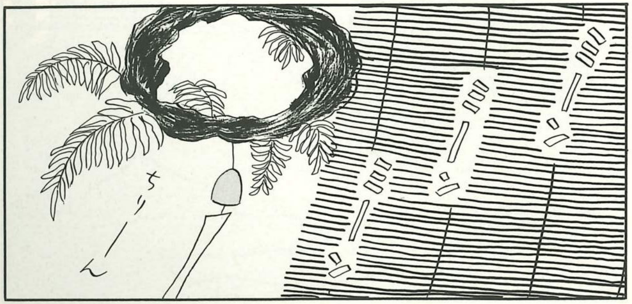
ていても　れぬふりをして　られたがり

古川柳(こせんりゅう)

つま楊枝(ようじ)

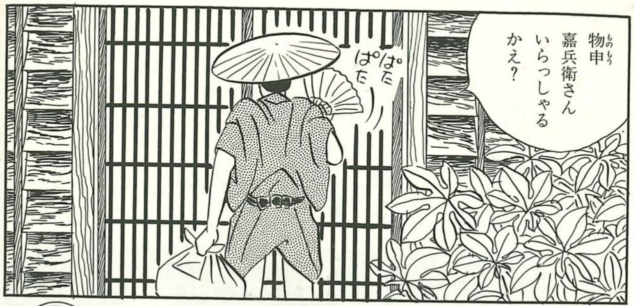
蟬(せみ)

のなく　下(した)に子(こ)どもが　二三人(にさんにん)

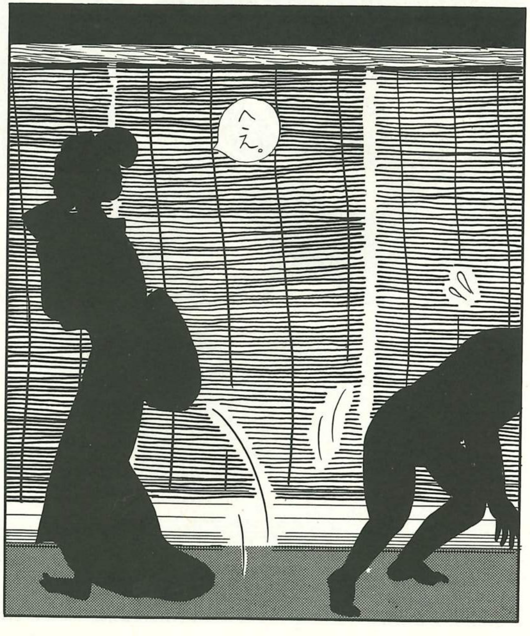


さく
さく
さく
ミーン
ミーン
ミーン
ミーン

おまいさん今度なぁ甘そうだよ。
はい
おめえこのごろちッとふとったんじゃねえか？
ナニサ、おまいさんこそおなかがこんなに……。



暑 気見舞 まくらとうちわ 持てにげ

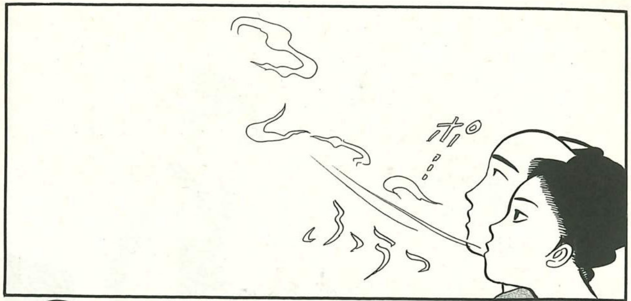


古川柳 つま楊枝

あ いさつに 女はむだな 笑ひあり

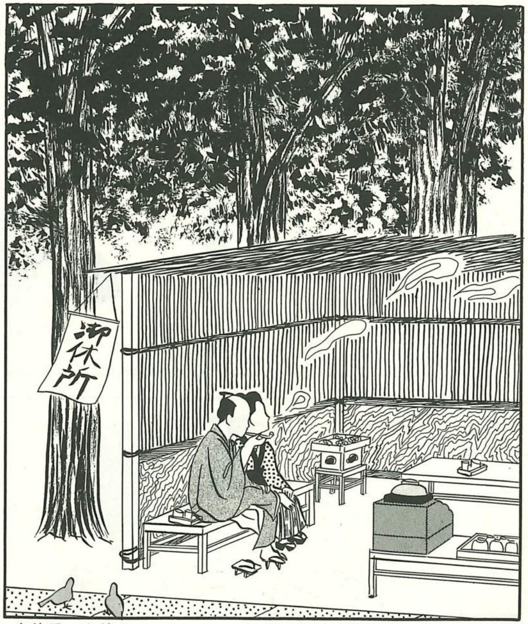
休所
所
ニコ
ニコ
ククッ
ククッ

……。
ポウ
ふっ



水(みず)

茶屋(ちゃや)へ　来(き)ては輪(わ)を吹(ふ)き　日(ひ)をくらし



水茶屋＝喫茶店

古川柳(こせんりゅう)

つま楊枝(ようじ)

酔(えい)

醒(ざめ)のぞっとする時(とき)　世(よ)に帰(かえ)り

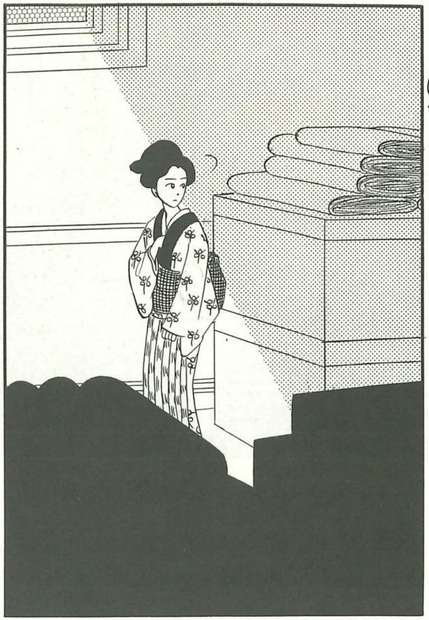
ピチャ!!
チュン
チュン
ゴンゴン

よれッ
カラカラ
帰ったよ。
どす
どす
どす
あんたッ!!
昨晩は一体どこえッ!!

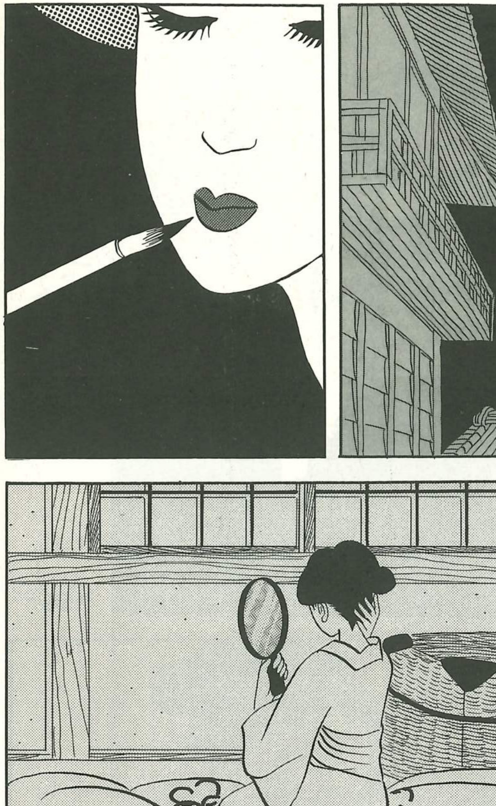
胸ぐらを 取った方から 涙ぐみ

古川柳

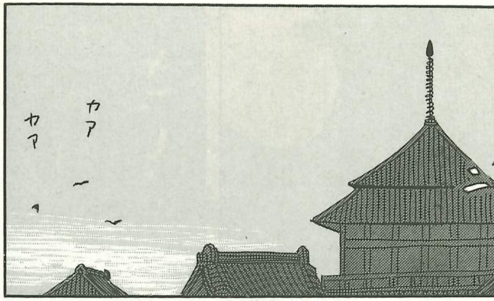
つま楊枝



あたりをきっと見渡して 文を出し



火の用心
さっしゃりませう
それじゃ
おいら
そろそろ…。
すっく
ぱん
あっ
でも。
おい
勝ち逃げは
なかろう。
ぐいっ
そうだ〳〵
義理でも
モウ一番!!

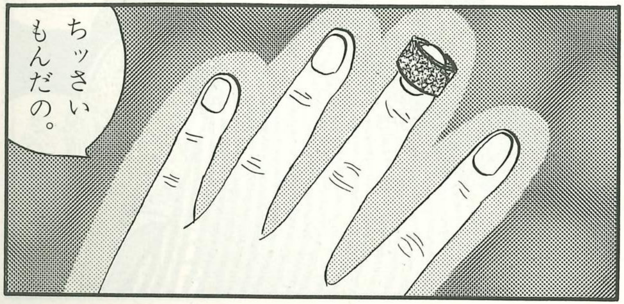


来（こ）ぬ君（きみ）の科（とが）を枕（まくら）にいふは無理（むり）

古川柳（こせんりゅう）

つま楊枝（ようじ）

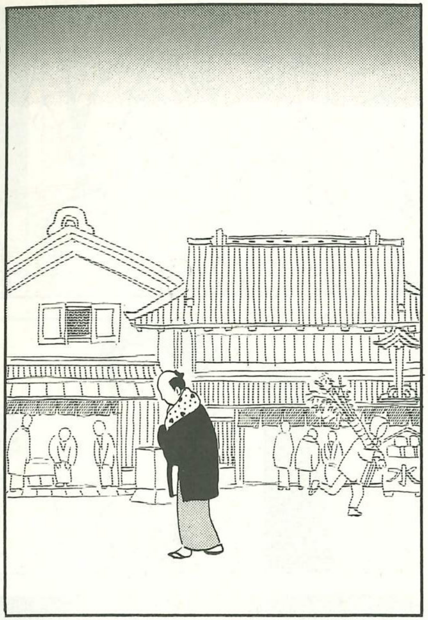
指抜（ゆびぬき）を男（おとこ）が当（あ）て おかしがり



ビリッと来た日にゃどうしょうと思ったよ。
南無三助かったなあ。
ちくちくうめえもんだ。
ちょっとお源ちゃん手元が暗いよ。
さっちゃん見直しちまうな。

おういんなとこで何油売ってんでい。
おれたちァ行くぜッ!
羽織のほつれを繕ってもらってんだ。ちっと待てやい。
ドジだなあお前。
で、ソノアレは何でえ?
何でもねえヨ幼なじみサ。

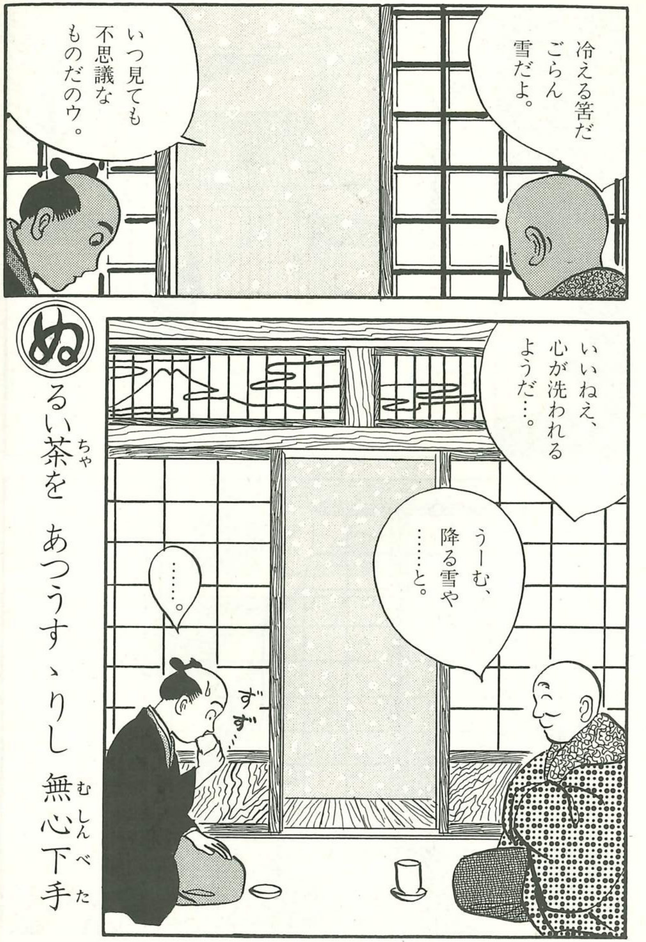
古川柳 つま楊枝



唇の皮を喰ふのは 冬のうち

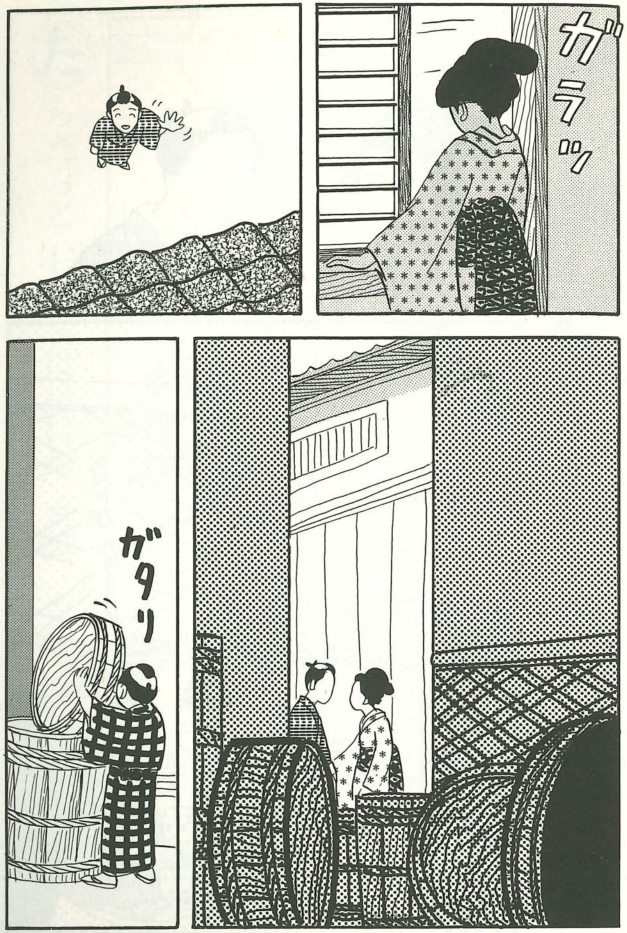
どう？
借りられ
たかえ？
駄目
だった。
……。
フウッ
ちょいと
手ェ
入れさして。
ゾク……
――ねえ、
おまいさん。
頼りにしてる
よ。

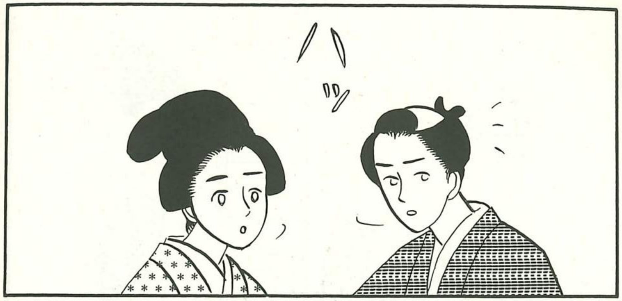
ぼさーっと
突っ立って
いずと
お入り。
どしたい。
ごぶさたじゃ
ないか。
へへっ。


冷える筈だ
ごらん
雪だよ。
いつ見ても
不思議な
ものだのウ。
ぬるい茶を あつうすゝりし 無心下手
いいねえ、
心が洗われる
ようだ…。
うーむ、
降る雪や
……と。
……。
ずず…

古川柳
つま楊枝
しかられて 娘は櫛の歯を数え
ピピピ…ッ

ニャー
チリリン
シーロ
やぁ。
ニー
うふっ
ニー
……。


ガラッ
ガタリ



樽

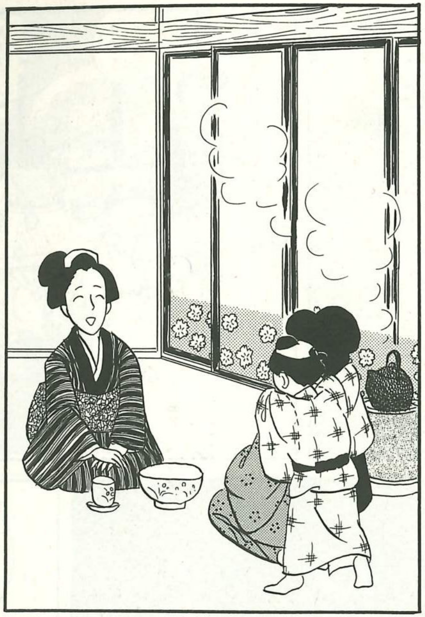
ひろい　あやうい恋の　邪魔をする

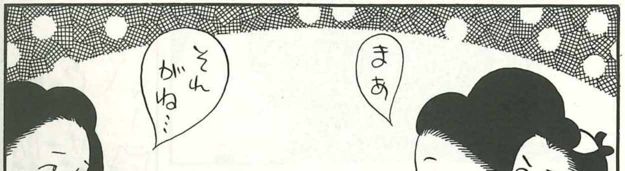
古川柳

つま楊枝

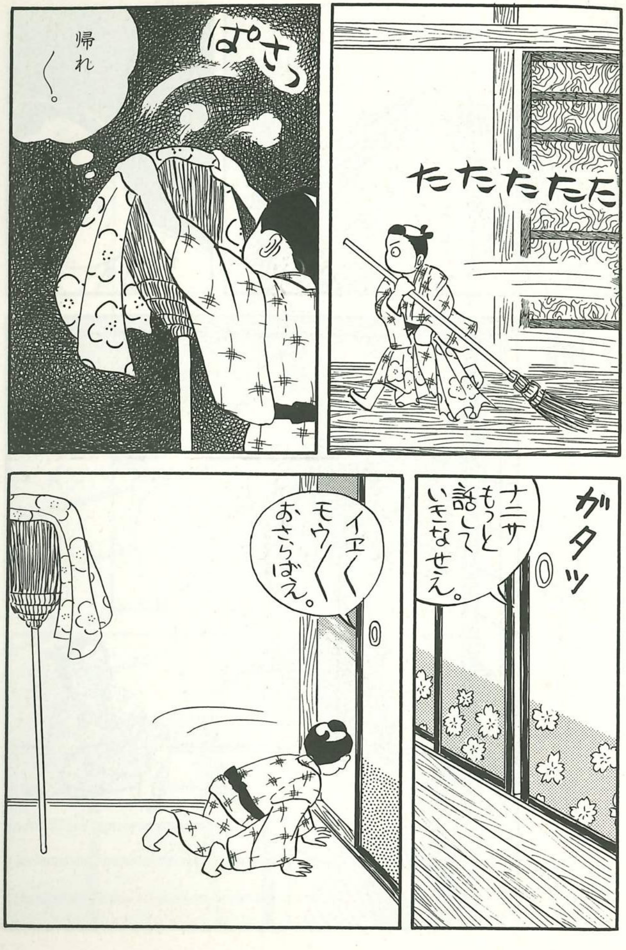
た

らたらと　おさらばいはぬ　女客





ぶらぶら
ミァ
あはは
パシッ
ねえ。
ニャー
ホホホ
ぺちゃくちゃ


たたたたたた
帰れ〜。
ぱさっ
ガタッ
ナニサもっと話していきなせえ。
イエ〜〜モウ〜〜おさらばえ。

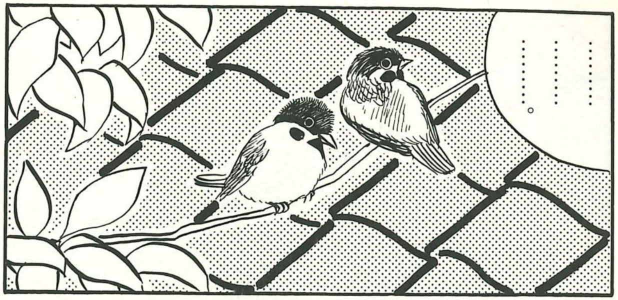
帰ったを 見ればほうきも 恐ろしい
……。

古川柳
つま楊枝
針箱を さがすと女房 とんで出る
鋏どこだァ?
カチャカチャ
だだッ
ちょいと待ちねえな 今出すによ。

ん？
何だ
これは？
あッ。
ぱっ
な、
なんでも
ないヨ。
なんでも
ねえなら
見せたが
いい！

あ、痛ッ!!
何をする
んだよッ!!
ナンダ
何をするとは
てめえの事だ。
——ったく
油断も
スキも……。

IV



妻(ツマ)の手(て)を　もぎりはなせば　母(はは)の文(ふみ)

古川柳

つま楊枝

好いたのが 来りや抱いた子と ほおづりし

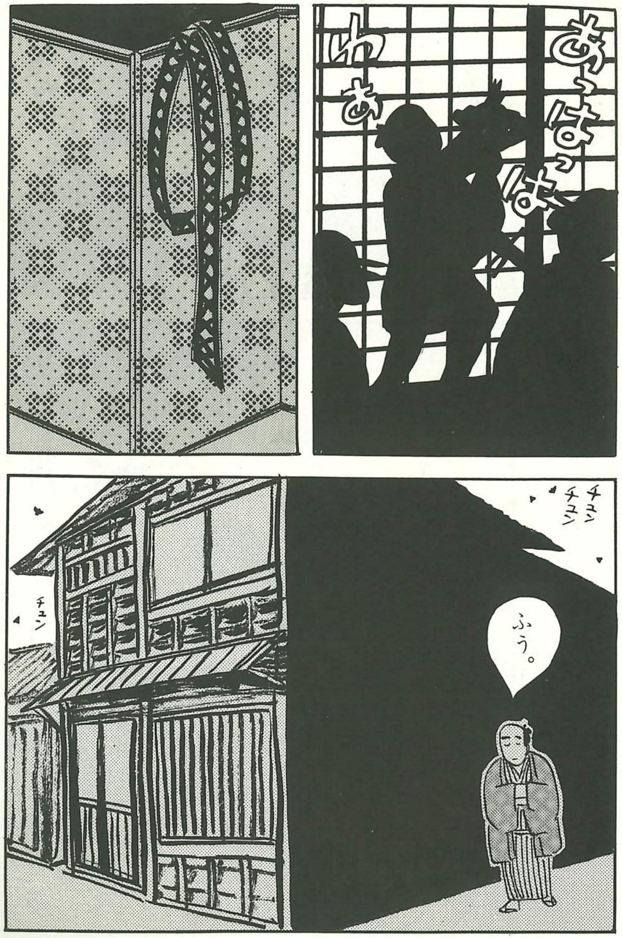
むにゅっ
にッ…
さっ
←子どもの手
ぷっ
坊ちゃま!! メッ!!
けん
たたたた
ぱ

元気?
い
けん・ぱ
!
ぱ
ぎゅむっ
坊ちゃま!!
けん

古川柳 つま楊枝

女房の 留守も中々 おつなもの

ナンダ、そんなら
鬼の居ぬ間
命の洗濯
行こう〳〵。
チャンラン
チャンラン
チャンラン

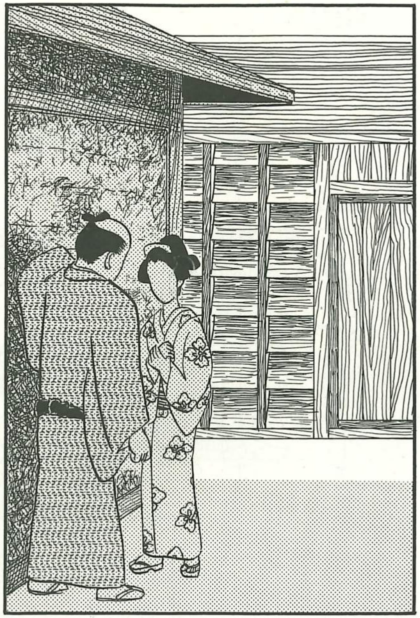

あっはっは
わあ
チュン
チュン
チュン
ふう。

朝帰り　首尾の良いのも　へんなもの

古川柳　つま楊枝

壁のすさ　むしりながらの　実ばなし

すさ＝壁土の中の藁（わら）など

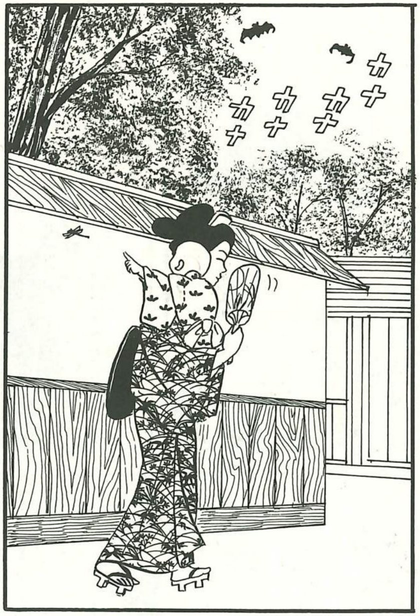


きっと……ネ。
ウン。
じゃ。
……。
……。
くるっ

なまじ持参金が多いから悪く勘ぐっているのだろうが。
そんなんじゃない。
会えばきっと気に入るよ。

盃(さかずき)に　ほこりのたまる　不心得(ふこころえ)

古川柳(こせんりゅう)　つま楊枝(ようじ)



粉(こ)のふいた　子(こ)を抱(だ)いて出(で)る　夕涼(ゆうすずみ)

い、いつのまに……。
んふふふふ似てる?
……。父親は?
誰だかねーーッ。
キャ
おクミ坊ッ!!

やぁだ小父さん真顔で……。
姉さんの子だよウ。
ガタッ
ただいまア!!ああ坊が腹ペコだァーー。
ハイハイ。
お前もこんな子が欲しいだろ。
ふふん。

あたりから やかましくいふ 年(とし)に成(なり)

古川柳(こせんりゅう)

つま楊枝(ようじ)

傘(かさ)かりに 沙汰(さた)のかぎりの 人(ひと)が来(く)る

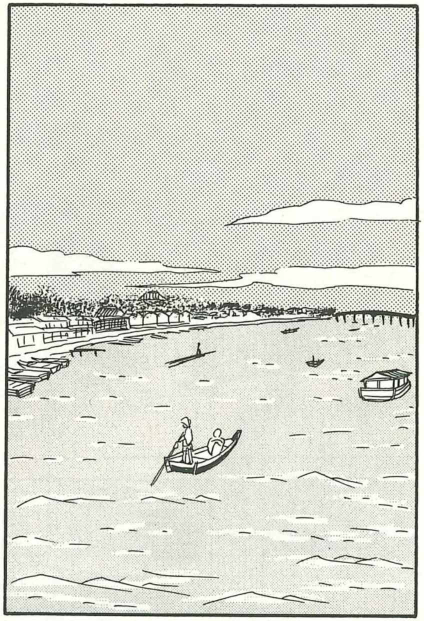
生憎と傘ア一本きりっきゃないからちっとあがって話してゆきなよ。
じきに止む雨サ。
トポトポ
はい。お茶じゃイヤかい。
ナンノ、お茶は好物サ。
ざあ
おゆうさん、ちっとも変わらないネ。
ざあ

一年やそこらでソウ変わってたまるものかネ。
ハハハ
そういや猫も同じだ。
タマよ。タマよ。
お前の新しいご主人さまはどんな人だい？
ニャー
何言ってんだか。主人は昔からあたしだよ。
そうじゃなくってサ、もう片一方の主人がサ……。

此部屋で 壱人寝ますと 気をもませ

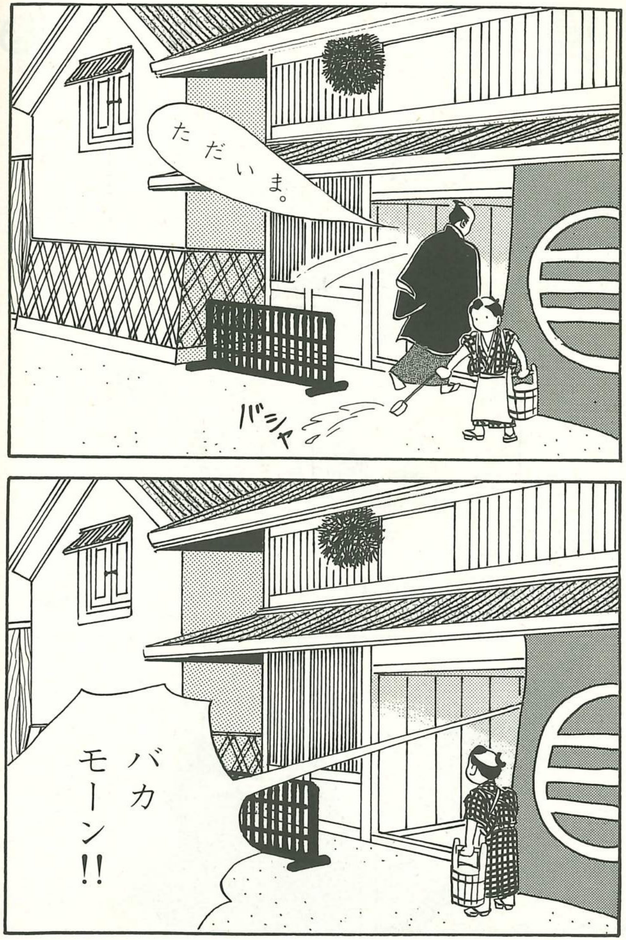
古川柳

つま楊枝



帰る猪牙 赤とんぼうと 行違ひ

猪牙＝吉原通いの小舟


ただいま。
バシャ
バカモーン!!

金はどこからか湧いて出るもんと思っていやがる。
一分あれば山ほどの薪が買えるんだ。それをお前てえやつは…。
金のありがたみなんてものをわかっとらん てめえで額に汗してかせいでみろッ
クドクドクドクド
ふわ
ねちねちねちねち
アクビをかみ殺している
あぐ むぐむ
あなた…福太郎も身に沁みたようですから…。
お前はよけいな口出しを……
む
ポロ

息子の耳は馬　顔は蛙なり

古川柳

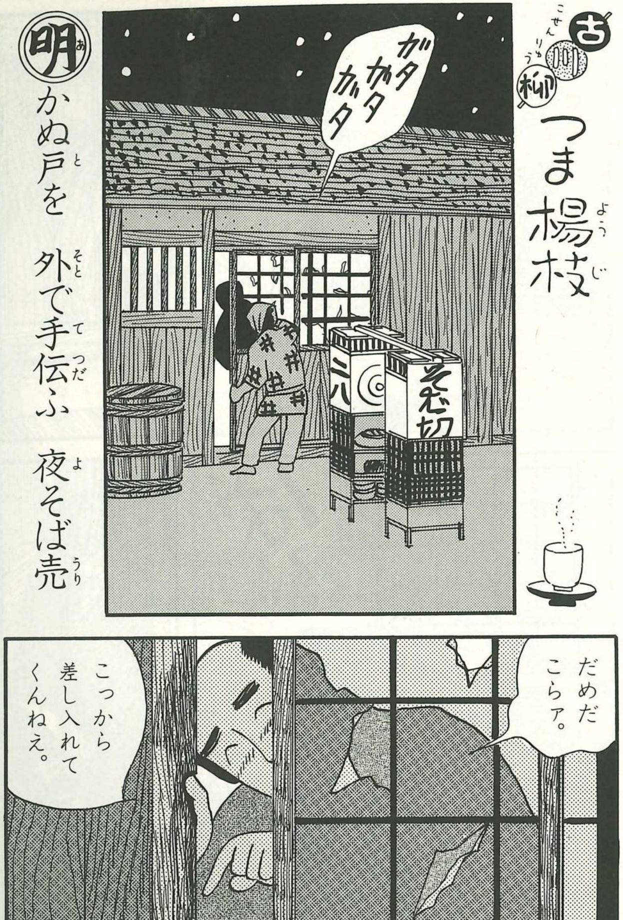
つま楊枝

ほころびの　内こたつから　首が生え

俺か？俺なァちっとむつかしい。
器量好みかえ？
イヤサ、年増で色の浅黒いのが良くてサ。
そんななァ世間にいくらもあるだろう。
それで頬ぺたにホクロがなくっちゃいけねえ。
……。

お松さん。
すっ
お前こたつにのぼせたんじゃないかえ。
ばふっ
サ、できた。
これ着て早く仕事へゆきな！
うっ

……。
そんなとこでぐず〳〵してても茶は出ないヨ！
火
箸にて野暮め〳〵と書いて見せ
ホラさっさと……。
ま


古川柳
つま楊枝
ガタガタガタガタ
二八
そば切
明
かぬ戸を外で手伝ふ夜そば売
だめだこらァ。
こっから差し入れてくんねえ。

ズズッ はふっ
ズズズッ はふっ
ホイ。おかげであったたまった。
ちゃりーん
ぱふ
ゴロン

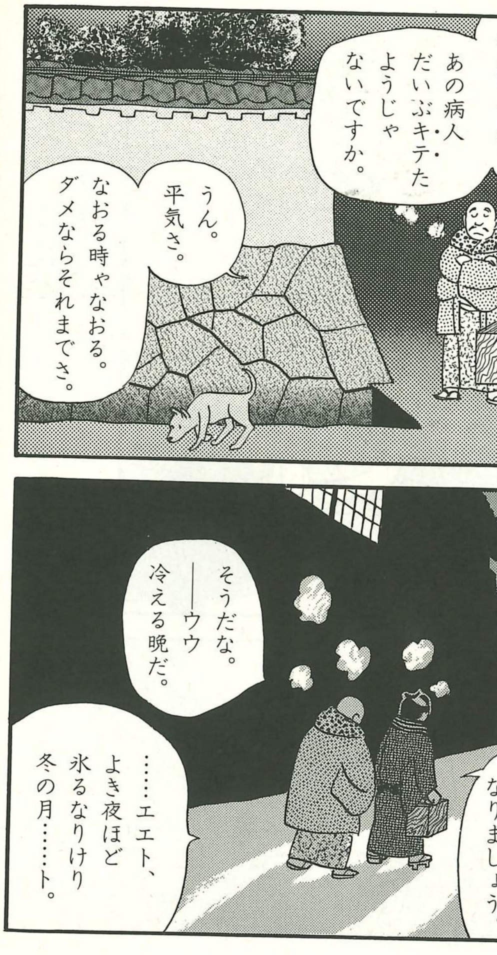
アオーン
ワン
ワン
ワン
ぶるっ
……よくその戸が開いたなァ。
騒ぐと為にならねえぞ。
ギラリ

すっぱりと　盗人にあう　一人者

古川柳

つま楊枝

みんな見放すに　藪医の頼もしさ


先生、あんなこと言って平気ですか？
あの病人だいぶキテたようじゃないですか。
うん。平気さ。
なおる時ゃなおる。ダメならそれまでさ。
医者をしくじったら二人で易者になりましょう。
そうだな。——ウウ冷える晩だ。
……エエト、よき夜ほど氷るなりけり冬の月……ト。

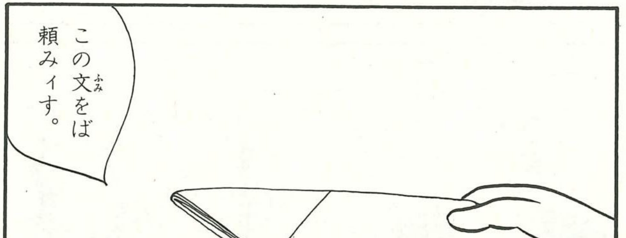
いいですね。誰の句です？
わしのとは思わんのか？
ええ。それで誰の作なんです？
フン。忘れた。
ねぇ先生。横に並んで話しながら帰りましょうよ。
ピタッ
いや、このほうが風よけになっていい。
ひどいなァ。

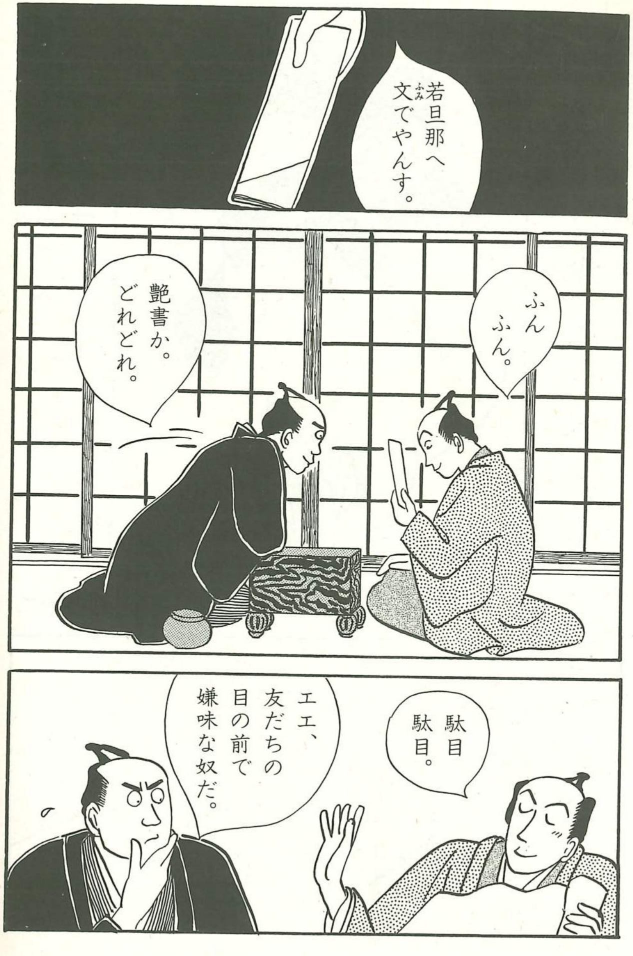
医者殿は 結句うどんで 引かぶり

古川柳

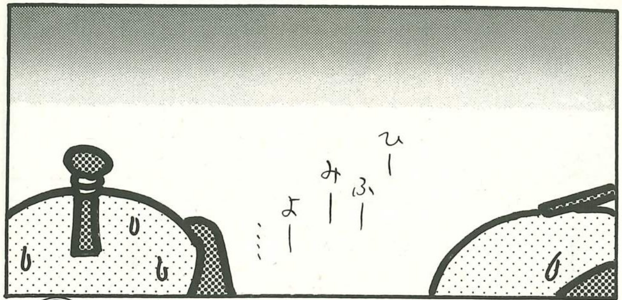
つま楊枝

なつかしく ゆかしく そして金と書




若旦那へ
文でやんす。
ふんふん。
艶書か。どれどれ。
駄目駄目。
エエ、友だちの目の前で嫌味な奴だ。

ふふふ。
ぜひにぜひにと二十ぺんばかりも書いてある。
いやじつにまいるネ
へッへ
それは若狭屋の胡蝶だろう。
ん!?
よくわかるな。
俺も貰った。
えええッ
嘘じゃない。
今しがた受け取った。

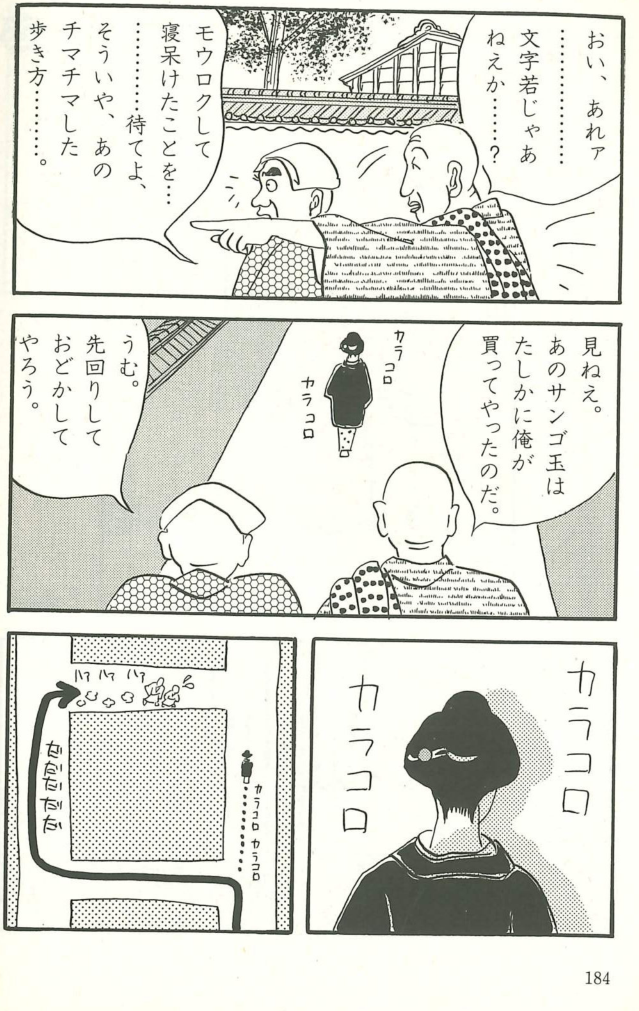


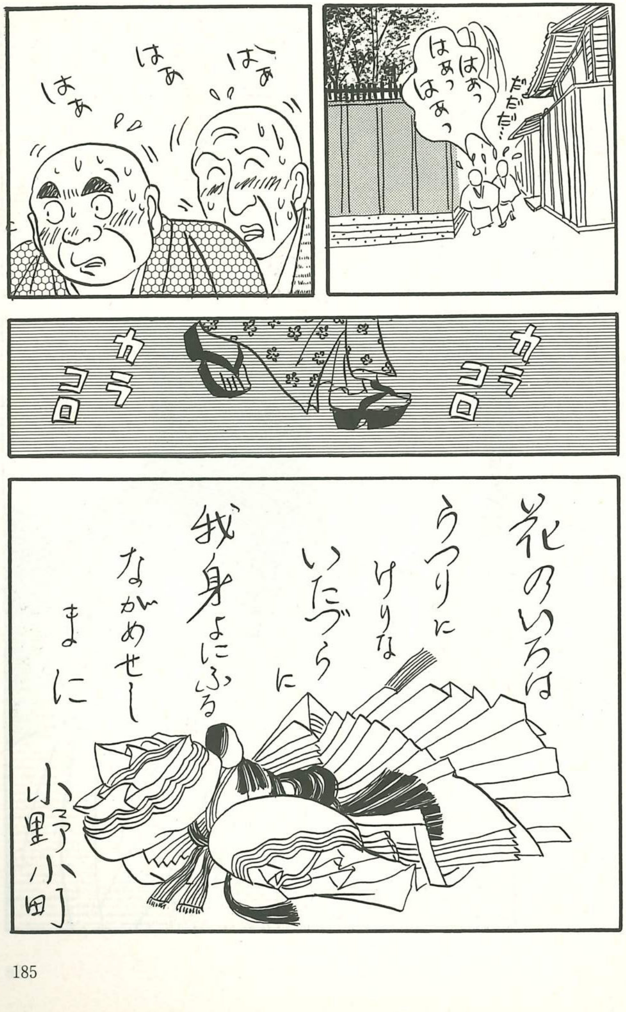
自惚を やめれば外に 惚手なし

古川柳

つま楊枝

湯殿帰りの 死でみたがる


おい、あれァ……文字若じゃぁねえか……?
モウロクして寝呆けたことを……待てよ、そういや、あのチマチマした歩き方……。
見ねえ。あのサンゴ玉はたしかに俺が買ってやったのだ。
カラコロ カラコロ
うむ。先回りしておどかしてやろう。
カラコロ カラコロ
ハァ ハァ ハァ
だだだだだ
カラコロ カラコロ


はぁ はぁ はぁ
はあっ はあっ はあっ はあっ
だだだだ…
カラコロ カラコロ
花のいろはうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに
小野小町

むかしの女(おんな) 女(おんな)ではなし

あとがき

田辺さん。輝く金平糖のような序文を、ありがとうございます。胸の星として大切にします。

この本を装幀してくださった長友さん、K2の皆さん、潮出版社の担当編集者の有田さん、ありがとうございます。

紙の向こうの方、こんにちは、ありがとうございます。

そして友人へ、いつも、ありがとう。

この連載は月に四ページです。四年かかってやっと一冊の本となりました。ほんとうにうれしく思います。

私は性格的にも物理的にもムチャクチャ腰が重いので、成り行き上関わらざるをえなくなった人々には多大なるご厄介をおかけしてしまいます。

私の行動の八割は、寛容で忍耐強い編集さんと友人たちと紙の向こうの方のお力によって運営されています。あとの一割九分が江戸からのナニモノかによる遠隔操作で、残り一分が自分自身の生きようとする本能です。

こうして、一冊、また一冊と、生存の年月が、手の中で重さを持つ形になっていくのは手品を見るようです。ただ、ただ、感謝あるのみです。

ありがとうございます。

一九八七年五月吉日

杉浦日向子

さくいん

あ行

相傘の　話の切れる　水たまり　101
あいさつに　女はむだな　笑ひあり　109
明かぬ戸を　外で手伝ふ　夜そば売　171
朝帰り　命に別儀　ないばかり　67
朝帰り　首尾の良いのも　へんなもの　150
朝寝する　人をおこすを　昼といふ　71
あたりから　やかましくいふ　年に成　158
あたりをきっと見渡して　文を出し　117
雨宿り　惜しい娘に　傘が来る　29
雨やどり　ごおんとついて　叱られる　32
医者殿は　結句うどんで　引かぶり　178
いつちよく　咲た所へ　幕を打　21
自惚を　やめれば外に　惚手なし　182
乳母どのを　貸しなといへば　あかんべい　146
おそろしき　ものの喰たき　雪の空　53
おちゃっぴい　へそから出たと　思って居　95
男じゃと　いはれた疵が　雪を知り　78

か行

帰ったを　見ればほうきも　恐ろしい　136
帰る猪牙　赤とんぼうと　行違ひ　163
かかり人　何をするにも　手くらがり　83
傘かりに　沙汰のかぎりの　人が来る　159
壁のすさ　むしりながらの　実ばなし　151
雷を　まねて腹がけ　やっとさせ　40
きかぬふり　するは娘の　吉事なり　17
煙管にて　とどかぬと　妾人を呼び　82
行水へ　瓜のにほひを　とぶりうめ　37

喰つぶす　やつに限って　歯をみがき　63
唇の　皮を喰ふのは　冬のうち　125
くどかれて　あたりを見るは　承知なり　66
来ぬ君の　科を枕に　いふは無理　120
粉のふいた　子を抱いて出る　夕涼　155
此部屋で　壱人寝ますと　気をもませ　162
こわい顔　したとて高が　女房なり　59

さ行

細見を　みてこいつだと　女房いい　70
盃に　ほこりのたまる　不心得　154
酒と女は　にくくない　かたき役　79
寒い時　おまえ鰹が　着られるか　28
四角でも　炬燵は野暮な　ものでなし　49
しかられて　娘は櫛の　歯を数え　129
しかられる　たびに息子の　年が知れ　74
死なぬかと　雪の夕べに　下げて来る　56
暑気見舞　まくらとうちわ　持てにげ　108
好いたのが　来りや抱いた子と　ほおづりし　143
すっぱりと　盗人にあう　一人者　174
蟬のなく　下に子どもが　二三人　105

た行

たらたらと　おさらばいはぬ　女客　133
樽ひろい　あやうい恋の　邪魔をする　132
妻の手を　もぎりはなせば　母の文　140
出合する　上をひばりは　舞って居る　94

な行

仲人を　こよみでたたく　お茶っぴい　20
なつかしく　ゆかしく　そして金と書　179
なぶられて　娘ほころび　投げ返し　124
女房の　留守も中々　おつなもの　147
女房を　ちっと見直す　まつのうち　9

ぬるい茶を　あつうすゝりし　無心下手　128

は行

ばかめらと　雪見のあとに　のんでいる　16
花の雨　ねりまのあとに　干大根　24
花の留守　大の字になる　居候　86
母の手を　握ってこたつ　仕舞われる　52
腹さんざ　戸をたたかせて　女房起き　87
針箱を　さがすと女房　とんで出る　137
火箸にて　野暮め〳〵と　書いて見せ　170
二日の夜　浪のり船に　楫の音　12
屁をひって　おかしくもない　一人者　33
ほころびの　内こたつから　首が生え　167
ほととぎす　口舌の腰を　折って行き　90
ほれたとは　女のやぶれ　かぶれなり　44

ま行

馬子唄に　二人ひれふす　麦の中　91
水茶屋へ　来ては輪を吹き　日をくらし　112
みんな見放すに　藪医の頼もしさ　175
むかしの女　女ではなし　186
息子の耳は馬　顔は蛙なり　166
胸ぐらを　取った方から　涙ぐみ　116
目も耳も　ただだが口は　高くつき　25
物思う　相手がなさに　蚊帳を釣り　36
紅葉見と　聞て内儀は　子をさずけ　45
紅葉見に　例年行が　いまだ見ず　48

や行

やかたから　人と思はぬ　橋のうへ　41
雪見とは　あまり利口の　さたでなし　13
湯殿帰りの　死でみたがる　183

指抜を　男が当て　おかしがり　121
揺りおこす　手をたたかれる　あじけなさ　62
夜そば切　ふるへた声の　人だかり　75

ら行

れていても　れぬふりをして　られたがり　104

わ行

笑って見　ぷんとして見る　鏡の間　98
酔醒の　ぞっとする時　世に帰り　113

解説

玉村豊男

このごろ、同年輩の友人が集うと昔話に花が咲く。まだそんなトシになったわけでもないと思うのだが、ひょっとすると、もうそんなトシになっているのかもしれない。

私は昭和二十年の生まれで、もちろん江戸時代に生きていたわけではないけれども、小さい頃(ころ)、東京西郊のわが家の裏通りを馬が闊歩(かっぽ)していたことを覚えている。馬車である。といっても、汲(く)み取った下肥を木の桶(おけ)に入れて運ぶためのもので、子供のころの私はその馬を〝クソ馬〟と呼んでいたものだ。

「それは、俺(おれ)は知らないなあ。だけどたしか馬糞(ばふん)は町のあちこちにあって、馬のクソを踏むと足が早くなるっていってみんなで踏んで歩いたもんだ」

「そうそう」

「青梅(おうめ)街道へみんなで外車を見に行ったり、バスが通ると排気ガスの匂(にお)いをわざわざ嗅(か)いだり……」

「あれが文明の香りだったんだよな」

てな具合に、話は盛り上がるのである。

「金魚売りって知ってる？」

「もちろんさ、あれは最近まであったじゃないか。じゃあ、シンコ細工は？」

「縁日であったよね。金魚すくいの網がウエハースになる前のころ」

「竹屋あー、さお竹えー、は？」

「最近はそうテープで流しながら軽トラでビニール・パイプ売ってるのがいるぜ」

このごろは物売りもめっきり少なくなった。

クソ馬の通っていた当時、わが家の近くでは、いかけ屋（ナベ、カマの修理屋）やコウモリ傘の張り替えの職人が路上で商いをしていた。ラオ屋（キセルの掃除）の出すカン高く単調な、それでいてときどき転調する独特の音も思い出す。

ということは、終戦直後のしばらくの時期には、ナベに穴があけば修理に出し、傘が破れたら布だけ張り替えてもらい、まだキセルを吸う人がたくさんいた、ということである。

最近では、電車の不正乗車をキセルと呼ぶことさえ忘れられかけているのではないか。キセルの金（カネ）の部分は雁首と吸い口だけで途中をつなぐ管（ラオ）は竹でできているから中途の料金をごまかす乗りかたをキセルというのだ、と、いまの若者には説明してやらねばなるまい。キセルはカンボジア語で管を意味し、竹はラオス産の黒斑竹を用いたのでラオという、などという知識はなかったとしても、昭和二十年代の子供にとってキセルや煙草盆

は、古めかしくはあったがまだ身近に生きている小道具だったのだ。

『風流江戸雀』を読んでいると、なにかとても懐しい気分になる。

この本に出ていて、そして私の子供のころにもあって、いまではほとんど見かけなくなったもの……たとえば行水、蚊帳、火鉢。

コタツだって昔は炭か練炭の掘りゴタツで、たしかにあれは子供ごころにもちょっと秘密めいたものだった。私は間違えて母の手を握ったことこそないが、足先がとなりの女の子のふくらはぎに触れたりとか……最近の上側にヒーターのついた置きゴタツでは手も握りにくいだろう。いや、違うか。その場合は……直接手で相手の腰あたりをアタックしやすいか。

いやですねえ、このごろは直接的で。

最近の女の子はスタイルがよくなった。

大根足というのも少なくなった。

ましてや〝ねりま〟などといっても誰もわかるまい。練馬では大根をつくる市街化調整区域農地は風前の灯だ。

だから誤解している人が多いのではないかと思うので断っておくが、大根足、というのは、単に太い足のことをいうのではないのである。

あれは、足（もちろんヒザから下）が全体にズンドーで、とくに足首が太い場合をいう表現。抜けるような白さへの憧憬も含めた、大地に根をおろした日本女性へのオマージュとで

もいうべき表現である。足は決して細ければそれでいいというわけではない。

最近の若い女の子は足が長い。トシをとれば、干し大根ではなく、ピアノレッグになるであろう。

ピアノの足を見てもらうとわかるが、あれは上のほうが非常に太く、足首に向かって急に細くなっている。西洋老人の体型である。あちらでは太い足をからかうときにはピアノレッグというのだそうだ。あれ、話がそれたか。

しかしそういう女の子が相手にしている今日びの若い男の子たちときたら、ヒョロヒョロと背ばかり伸びて細長く、やけに小綺麗で、一日に三回歯をみがくような奴ばかりである。日本の国も、そういう連中に食い潰されるかもしれない。

まあ、まあ。抑えて。

昔話ばかりしていると、だんだん、禿げで丸眼鏡の〝おじさん〟みたい（私の父親はこのキャラクターに似ていた）になってしまうからやめておくが、室町の末期あたりからかたちづくられてきた、いわゆる私たちが〝日本的〟と考えている生活文化の多くが江戸の後期にいたって確固たるスタイルに成熟し、それらは明治の維新を経ても基本のところでは変わるところなく受け継がれた、ということなのだろう。しかもそうした日本的生活文化とそれによって育まれた心情は、西洋的価値観の流入にもかかわらず、約半世紀近く前の戦争のころまではしっかりと生き続けていたのである。私が垣間見た終戦直後の懐しい風景は、それら

が消え去ってゆく瞬間のまぼろしのようなものであったのだろう。

杉浦日向子さんはひょっとすると、できれば江戸時代に生まれて暮らしてみたい……と思っているかもしれないが、私はとくにそう考えたことはない。しかし、

「カミナリさまがおヘソをとりにくるぞ」

といわれてあわてておなかをおさえる子供のほうが、さかしらに鼻で笑う今の子よりもずっと健全で想像力も豊かに違いないと思うし、一週間に四日かそこいら働いてあとは酒を飲み、花を賞で、ときには吉原くんだりへ遊びに行く江戸の職人の暮らしのほうが、宵越しのカネの金利を心配している現代人の生活より、よほどまっとうなものであることはわかっている。

貧しいがたしかな輪郭のある暮らしがあり、ささやかだが暮らしの中に愉しみがあり、愉しみはどこか日常の狂気を宿していて、夜には深い闇があった時代。

〝日向子浮世絵〟は、さりげなく、しかし的確に、そんな世界を描いていく。

たとえば霜月の縁先には冬の仕度がととのえられているが、柿の実は鳥が食べるように残されている。

そう、自然の摂理にしたがった暮らし。こういうのを現代では、

「エコロジカルなライフスタイル」

というのだろう。

（平成三年五月、エッセイスト）

この作品は昭和六十二年五月潮出版社より刊行された。

杉浦日向子著
江戸アルキ帖
日曜の昼下がり、のんびり江戸の町を歩いてみませんか——カラー・イラスト一二七点とエッセイで案内する決定版江戸ガイドブック。

尾辻克彦
赤瀬川原平著
東京路上探険記
純粋階段、缶塚に無用門……。街中に隠れた〈超芸術〉物件を求め、東京＝現代の深層をローアングルから観察してつづる名エッセイ。

高橋源一郎著
ぼくがしまうま語をしゃべった頃
現代文学、少女マンガ、アイドル、歌謡曲……現代のすべてが一冊でわかってしまう伝説的百科全書エッセイ、ついに文庫化なる！

泉　麻人著
B級ニュース図鑑
教科書や年鑑には決して載らないトホホな事件を採集・整理し、90年代の文脈において検証する文庫書下ろし時空積分コラム。

泉　麻人著
泉麻人のコラム缶
200字5枚に命を張るコラム界の仕事人・泉麻人。80年代における彼の偉大な足跡を濃縮パックした天然果汁100％のコラム缶詰。

野田秀樹著
おねえさんといっしょ
見よ！　日本出版史上に輝く驚愕の駄文集大成！　孤高の天才野田秀樹の埋もれたる業績を発掘。いま世に問う、読書人必携の名著！

新潮社編
時代小説大全集
白石一郎、早乙女貢、隆慶一郎、津本陽、夢枕獏……。まだ夜の闇が深かったころを描く十七人の名手による時代小説アンソロジー。

新潮社編
勝者と敗者
—時代小説大全集2—
ゆっくりと流れてゆく時間に生きた、武将、剣豪、商人たちの姿を鮮やかに映し出す、15の名編。『時代小説大全集』の第二弾！

新潮社編
人物日本史 古代・戦国
—時代小説大全集3—
歴史を作ってきた人間たちを描く時代小説の名作を一堂に集め、日本史を人物で辿る。古代から戦国武将の時代まで、全21編を収録。

新潮社編
人物日本史 江戸
—時代小説大全集4—
江戸開府から激動の幕末まで、徳川三百年の治世を生きた、武将、文人、志士たちのさまざまなドラマ。名作時代小説全20編を収録。

玉村豊男著
パリ 旅の雑学ノート
2冊目
レストランで本場のフランス料理にありつく法、ホテルの泊り方、ショッピングのテクニックなど、パリを楽しむための本。写真多数。

玉村豊男著
ロンドン 旅の雑学ノート
紳士の定義、本場のビールとローストビーフの楽しみ方、タクシーの乗り方…etc. 玉村式ロンドンの楽しみ方を紹介。写真・図版多数。

新潮文庫最新刊

池波正太郎著
黒幕
徳川家康の謀略を担って働き抜き、六十歳を越えて二度も十代の嫁を娶った男を描く『黒幕』など、本書初収録の4編を含む11編。

筒井康隆著
筒井歌舞伎 影武者騒動
上方歌舞伎を著者が整理・改作し、スラプスティック劇顔負けの大ドタバタ劇に仕立て上げた意欲作3編を収録。筒井歌舞伎決定版。

小林信彦著
背中あわせのハート・ブレイク
(『世間知らず』改題)
たがいに惹かれながらも、すれちがう少年と少女の想い。青春のワン・シーンを描き、爽やかな初恋の感動を甦らせるラヴ・ロマンス。

塩野七生著
レパントの海戦
一五七一年、無敵トルコは西欧連合艦隊の前に、ついに破れた。文明の交代期に生きた男たちを壮大に描いた三部作、ここに完結！

曽野綾子著
失敗という人生はない
—真実についての528の断章—
著者の代表作の中から、生きる勇気と慰藉を与えてくれる528の言葉を選び、全6章に構成したアフォリズム集。〈著作リスト〉を付す。

山村美紗著
美紗の恋愛推理学
—友だちより"いい彼"をつかまえる法—
相手は本気？　それとも遊び？　推理力の差は、恋愛は勿論、人生の明暗さえ分けます。着眼のポイントと愛の技術をアドバイス！

新潮文庫最新刊

伊藤桂一著
病みたる秘剣
御用聞をお役御免になった浜吉親分。今は風車など売っているが、昔鳴らした腕の冴え、捕物の虫はおさまらぬ……。連作捕物12編。

広瀬隆著
新版 眠れない話
—刻々と迫りくる日本の大事故—
チェルノブイリは本当に対岸の火事か？ 地獄の日を避けるために、国内で続発する原発事故を検証する。最新データで詳説する新版。

杉浦日向子著
風流江戸雀
どこか懐かしい江戸庶民の情緒と人情を、「柳多留」などの古川柳を題材にして、現代の浮世絵師・杉浦日向子が愛情を込めて描く。

鈴木孝夫著
ことばの社会学
日本語と日本文化が現代日本の国際化のなかで、どう位置づけられるべきかということを「ことば」を切り口にして論じたエッセイ集。

週刊朝日 風俗リサーチ特別局編著
デキゴトロジー vol.2
—ホントだから困っちゃうの巻—
誰にも言えないこんな話、あんな話一四〇話。傑作デキゴトの数々を、あなただけにこっそり教えます。抱腹絶倒の面白実話集第二弾。

J・アーチャー 永井淳訳
チェルシー・テラスへの道（上・下）
貧しい野菜売りに生れた少年チャーリーは、ロンドンの高級商店街チェルシー・テラスの全店舗買収を夢見て、苦難の道を歩き始めた。

新潮文庫最新刊

S・コンラン 山本やよい訳
悪夢のバカンス（上・下）
クーデターに巻き込まれた上流階級の女たちは、未開のジャングルに取り残された——。迫真の超大型サバイバル・ストーリー。

S・マイケルズ 平田敬／P・コベット訳
警部サマービルの戦争
体力はもちろん、武器の扱い、盗聴、戦略、全てに長けた恐るべき〈人間兵器〉サマービル警部。家族を殺され、彼は復讐の鬼と化した——。

椎名誠著
新橋烏森口青春篇
明るくおかしく、でも少しかなしい青春——小さな業界新聞社の記者として働くシーナマコトと同僚たちの〈愛と勇気と闘魂〉の物語。

泉麻人著
泉麻人のコラム缶
200字5枚に命を張るコラム界の仕事人・泉麻人。'80年代における彼の偉大な足跡を濃縮パックした天然果汁100％のコラム缶詰。

五木寛之著
フランチェスカの鐘
真紅のケシに彩られた中世都市アッシジを舞台に、美貌の青年をめぐって妖艶な謎の女性と若い娘が奏でる危険な愛のコンチェルト。

津本陽著
鬼の冠
国内各地を放浪し、合気の術を教え歩いた大東流合気柔術宗家・武田惣角。神業の如き技を身につけた孤高の達人の生涯を活写する。

風流江戸雀（ふうりゅうえどすずめ）

新潮文庫　す－9－2

平成三年六月十五日　印刷
平成三年六月二十五日　発行

著者　杉浦日向子（すぎうらひなこ）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)三二六六―五一一一
　　　編集部(〇三)三二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社

© Hinako Sugiura 1987 Printed in Japan

ISBN4-10-114912-7 C0179